

犧

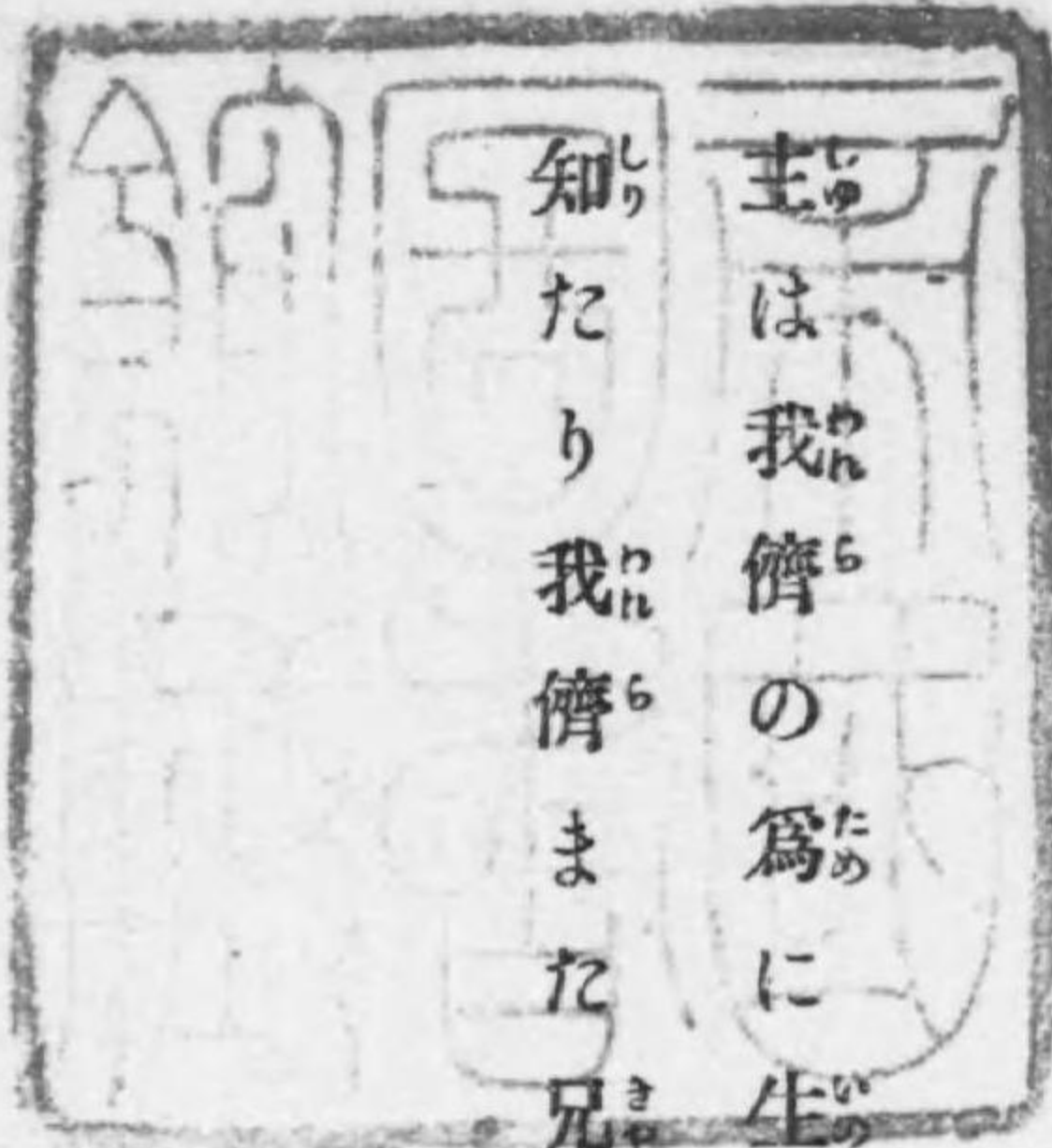
牲



始



特115
133



人その友の爲に己の命を捐るは此より大なる愛はなし

(ヨハネ傳第十五章第十三節)

主は我儕の爲に生を捐たまへり是に由て愛といふ事を
知たり我儕また兄弟の爲に生を捐べし

(ヨハネ第一書第三章第十六節)



犠 牲

久保田 ふく 著

第一編 郷 里

主よ御手もて

ひかせたまへ

たゞわが主の

みちをあゆまん

いかにくらく

けはしくとも

みむねならば

われいとはじ

有明の星のまだ西の空に名残を止めてゐる、初霜に白い初秋の朝、何處からともなく透き通る様な讚美の聲が、澄きつた空や淋しい墓場の森の梢に響き渡つた。然し其聲は何となく湿ぼく哀である、けれどきりゝとして強かつた。其いぢらしい

哀の聲の響いた森の奥に昨日の夕方埋葬された。

「彼死れども信仰に由て今なほ言へり。」

と、いふ新らしい墓標の前に跪つて、一生懸命に何事か念じて居る若い娘、落窪んだ目から流るゝ涙は、瘦こけた頬を傳うて膝の上にさへ落ちる。時々は嘔り泣きの音も聞こえる。

やがて彼女が項低れた首を上げた時には、涙の目にもはゝ笑が浮んで居た。

彼女は再び、

この世を主に

さゝげまつり

神のくにと

なすためには

せめもはぢも

死もほろびも

なにかはあらん

主にまかせて。

と、又唱ふた。

哀な處女の讚美に亡き人の美しい意志を繼がうとする、健氣な決心がありありと現

はれて居た。

二度跪びて祈うとして居ると、後の方からカサ／＼と人の来る音がした。

「幸子さんは此處へ御出でしたか？」

「あら先生、お山に御出になりましたの？」

「エ、僕は山で禮拜を済して來ましたが墓參の爲わざわざ廻りました。よい處でした

一處に祈りませう。」

二人が共に祈うとして居ると、

「やあ先生、もう御出になりましたか？どうも疲れて遅くなりました。」

と、云ひながら幸子の父が前の方から走つて來た。

三人は共に跪びて涙ながらに亡き人の美しい信仰の生涯をしのび、一生清い遺志をつぐ事の出来る様に心から祈つた。そして死の眞際まで聲高らかに唱ふた讚美を三人は熱心に歌うた。

手には緒琴口にはうた

たのしきは御國

すぎし時のうきなやみも

あよぎしらべとならん

きよきしらべとならん

すぎしときとうきなやみも

きよきしらべとならん。

と、終の一節がくりかへされた。讚美が終ると牧師は手を高く上げて此父子二人の祝福を祈つた。

明鳥はバタ／＼羽ばたきしてお墓の森の高い處でカア／＼と淋しく啼いた。三人は静かに無言のまゝ町の方へ立ち去つた。

二

幸子の父と言ふのは此町の古い醫者であつた。若い時の彼は非常の酒のみであつたがある冬の夜、一日の働に疲れて、炬燵に暖まりながらうと／＼して居ると、

「先生！先生！苦しいから御助下さいませ〜。」

と、表の雪の中に立て若い一婦人が叫んで居る。あつと思つて起て見ると夢である再び炬燵に這入てうと／＼すると、

「先生！先生！苦しいから御助下さい。」
目を醒すと矢張夢である。

幾度となく同じ事の繰返さるゝうちに夜が明けてしまつた。

朝になると雪を冒して四人の人が馬を牽いて十里ほど離れた山奥の友達の處から、奥さんが病氣で大變わるいからは非來て戴きたいと迎へに來た。いつもなら此大雪に山深い人里はなれた處などへ行ことをしない。けれども昨夜の夢になんとなく心ひかされて、早速馬に乗り、此友人の家を訪づれた。友人は非常に喜んだ。彼は熱心なキリスト者であつたから絶えず友人の大病について心配して居つたので。彼は此友達の醫者が來て居るのを幸ひに熱心に彼に傳道した。

とてもと思つた病人は不思議にも段々快方にむいた。幸子の父は治療の爲十四日間

滞在して居る間に、全く己が罪を悟り救を信じた。新しい命に生た彼は主の全能を信じた。自分は弱い、然し主の力は強い、其主の力に由て總ての事に勝得て餘あるとの御言葉を確信した。其時から飲酒はびつたりやんだ。家へ歸ると早速戸棚を開て、今迄自分の命よりも大切に居つた、酒の器をメチャ／＼にこはしてしまつた。彼は公言した。

「酒を飲は罪である、罪を犯す器を他人に與ふるも亦罪である」

「故に如何に高價の物でも其儘に置くは再び罪を犯させる誘惑物であるから置く事さへも罪である」と、又

「偶像を拜するも罪である。故に木や金にて形作つた物を拜するも罪である」

と、彼は佛壇から位牌を、神棚からお札を卸して、焼たりメチャ／＼に毀してしまつた。

「神は靈なれば拜する者もまた靈と眞をもて之を拜すべき也。」
と、此精神が彼の信仰に生た初めての行爲であつた。

間もなく彼は上京した。死すとも主より離れないとの固い決心を以て、築地のある教會で洗禮を受けた。早禁制の札が取去れて十三年になるが、都でさへ切支丹邪宗門といふて恐ろしがつて居る。況て田舎はどんなであつたであらう。親類否兄弟とても寄つく者もない。

「ヤソ醫者」ヤソ醫者」と恐しがつて一人の患者さへ來ない。

然し彼は平然として居つた。そしてよい折と自己の職業をそつちのけにして傳道に力を盡した。この新生涯の意氣潑瀾たる中に生れたのが幸子である。

彼の父は神の御心のなされる爲に男兒を與へ給へと熱心に求めた。祈によつて與へられたのが亡人となつた一雄である。彼は信仰の家に生れ、信仰の中に育ち、そして美はしい信仰を以て此世を去たのである。

三

葬式がすんでから三日目である。闇夜の眞黒の幕がまだ巻去れない朝早く、城山の岡の上の木の根に腰打かけて、牧師と幸子は熱心に祈つて居つた。昨日の朝一所に來

た幸子の父は疲れた爲に今朝は此處に來ない。

熱心に世の爲、人の爲に祈つて居た牧師の祈りは、いつの間にか己が罪の懺悔に變り、遂に聲さへ立て泣出した。一雄の病の枕邊にあつて、互に信仰の經驗を語り合ふて、牧師の單純なる信仰に心から敬服して居た幸子は事の意外に驚かされた。

幸子は今までのあたり、自己の犯した罪の爲に悶へ苦しむ牧師を見、同情は彼女の全身に満た。然し彼の犯した罪に同情する事は出来なかつた。

「あなたの犯した罪の爲に、あなたが苦しむのは當然の事です。苦しむ事があなたの爲です。」

牧師は己が罪の呵責に苦しみ、息もたへだへになつて居る。暗黒は牧師を掩ふた。

彼はサメくと泣いた。

「あゝ自己の犯した恐るべき罪！」

罪のある處に苦痛がある。罪惡のある處に刑罰があるは當然である。甘かりし禁制の果實、嘗て禁制の果を食してエデンの園を追れしアダムの如く、あゝ我も亦、再び

かく思ふて彼はヒシと泣いた。

幸子は口を開いた彼女の口もとはほゝ笑があつた。彼女の言葉は靜に柔であつた。

「罪の價は死なり」

「エス様は其先生の罪の爲に十字架上に苦しんで死んで下さつたではありませんか？

其處に先生の救があります。ねエ先生、私もその爲に御一所に苦しませう。」

前後も知れないほど罪に跪いて居つた牧師はふと我にかへつた。そして己に私語た

「あゝ我あやまてり、されども、

「罪のます處には恵もいやまさる。」

牧師はやゝ力づきたる様子にて口を開いた。

「神様は私を恵んで許して下さいさる。然し此汚れた私、二度神の聖い使人となる事は出来ません。私は今迄べんくとして居つた事を實に耻かしく思ひます。早速辭し

て東京へ歸らうと思ひます。」

「い、エ先生、それではエス様の救は何の役にも立たせん。どうかその悪い關係を打ち切つて、新しく生きて、そして先生御自身、神の恵を證明なさつて下さいませ。私に出来る事ならなんでも致しますから。」

牧師はたゞサメと泣いて居るばかりである。

幸子は二度云ふた。

「先生！あなたは決心して打ち切る事が出来ませんか？」

「いや、僕は切うと思ふて却て失敗しました。それが私の失敗の一步でした、彼女は聖句を以て私を誘うとしました。」

「先生どうか打ち勝つて下さいませ、私も出来るだけ骨折ますから。」

「然し一度泥の中に落ち込むとどうしても上ることが出来ません。腕けば腕くほど。」

「神様の爲に、家族の爲に、そして牧師の爲に、お姉様あなたの生涯を捧げて下さい。これが忘き弟の最後の言葉であつた。」

「エス様の力によつて私が御引受します、御歸りになりましたら早速あの人をお呼び下さいませ。」

「エ、それではさうして戴きませう。私一人では尙々危険ですから。」

二人は共に跪いて此事の善に解決される様に熱心に涙をもて神に祈り求めた。

ほのぼのと東の空が白み渡つた。木々に鳴く小鳥の讚美さへ麗かに、長閑かに楽しくさこえる。山の下の農家の雞が時をつくつた。

二人は無言のまゝ山を下り、堤防傳ひに弟のお墓の方へ行くのであつた。

四

郵便を出した翌日、學校の歸りに彼女は浮きくした様子をして牧師の家を訪れた。約束の時間に来て居つた幸子は懇に彼女を迎へて二階へ通した。

三人は三つ鼎に座を占めた。心の中に自分の願ひの成る様に祈つて居つた幸子はやをら口を開いた。

「今日はお呼び立てして申譯がありません、實は少し御話したい事がありましたのよ。」

ね、梅子さん、私からでは誠に差でがましいのですけれども、實はね、先生のことね、眞實にお氣の毒ですけれども、今日限り關係をお断ち下さいませ。」
梅子は吃驚して云ふた。

「どうして？ 私幸子さんが用があるつて云ふて来たからあなたに成立させてくれると思つて来たのに、人を馬鹿にして居る、大きなお世話よ。」

「眞實に失禮ですが、亡くなった弟も申して居りましたし、先生からも伺つて、それはよくない事ですし、又神様の御旨に叶はない事です。あなたも神様の御心を傷める事はお望でないでせう、断然おきり下さいませ。」

と、幸子はキツパリ宣言した。彼女の言葉には一種いふ事の出来ぬ權威があつた。幸子は自分自身おどろいた。たしかに自分の力でない。ある力が自分に、加へられて居た事を感じずには居られなかつた。

強く見えても悪は弱い、虚榮心の強い梅子は、まだ自分の名と、自分の地位の爲に強く云張る事が出来なかつた。そして余儀なく承諾したのであつた。牧師は幸子に

「私が貴女を導かねばならぬ身でありながら、却つて過らせた罪を許して下さい。

僕は再び貴女に觸れません。」

と、いふた。

梅子は憤然として立ち上つた。

「梅子さん、私ね私に出来る事なら何でもいたしますから、遠慮なくおつしやつて下さいませ。そしてどうかこれから清い／＼お友達になつて下さいませ。」

と、幸子は眞心こめていふた。

「いゝえ、私なんかあなたのお友達になんかなれるもんですか、覚えていらつしやい

キツトお禮はしますよ。」

と、梅子は来た時とはすつかり變つて、憤怒に全身をブル／＼震はしながら足音高く出ていつてしまつた。

恐ろしい毒婦の出でいつた後、幸子は牧師と二人で跪つて、彼女の心から悔改る様祈つた。

彼女は女學校時代にはや墮落の淵に落ちて居た。近くに居つたある牧師は氣の毒に思ひ彼女を教會に導いた。異性にかけて抜目のない彼女は唯一の働場として彼女の教會に入入した。

彼女のかゝる行爲は教會にも學校にも漲つた。彼女は止むを得ず學校を辭して、とある片田舎の小學教師となつた。然し彼女の性行は改まらなかつた。彼女は轉々遂に今奉職しつゝある小學校まで流れて來たのであつた。

ある日の夕方、彼女の家主なる信者を訪れた牧師は、其時はしなくも彼女を見知つた。獲物を待つて居つた彼女は巧に牧師をそゝつた。

其後牧師は彼女と結婚をしやうとして、彼女を導いた牧師に相談した。然し許されなかつた。彼は恩人である先輩にも許を乞ふた。けれども許されなかつた。

兎や角して居る内に、牧師も彼女の真相を知る様になつた。切らうとして彼女を呼だ。彼女は再び涙と聖句とを以て牧師を誘惑した。牧師は遂に一生涯拭ふ事の出來な

X
X
X
X
X

い汚點を、白紙の様な清い彼の生涯につけてしまつた。

彼の祈は絶えた。勉強も休んだ。思想は枯た。感想もない。教會員は牧師を疎み出した。かゝる中にあつて一雄は牧師の弱點を知りながら、内に潛み居る純なき信仰を發見し、牧師を敬愛し勞はり、誘惑に打ち勝つ様、人知れず祈り且助けた。

弟なる一雄は危篤の中にある。不信仰なる従妹の病の回復を己が命にかへて神に祈つた。不思議にも祈は聞れ、恐るべき病は一雄を見舞つた。あらゆる新薬も力限りの治療も彼を生すことが出來なかつた。遂に彼は死して、従妹なる冬子は生きた。

一雄は全く己を神に獻げ、命を棄てて従妹や牧師の爲に救を祈つたのであつた。

五

例の様に早天祈禱會から歸つて來た父と牧師と幸子の三人が臺所から這入つて來ると、勝手に朝飯の仕度をして居た母はサメ／＼と泣きながら、

「先生もう此處をお去になる決心をして下さい。」
「何故ですか？」

『私の實驗上何方でも、私の家に繁くいらつしやると、必ず排斥運動が起きます。』
『あゝさうですか。』

と牧師は不思議さうに、けれども氣のない返事をして居た。
然し幸子の母は必ず問題の起ると云ふ事を豫言した。

X
X
X
X
X

幸子の父が信者になつて約二十三年、自己の書齋を講義所にあて、自分みづから東
奔西走して教會の基礎をつくつた。以來約十年で形ばかりの獨立教會が出来た。

長い間逆境に堪えてしかも我利に疎く、何事にも卒直な幸子の母は、どんなに神
の爲に働く者を愛し、其爲に骨を折たのであらう。彼等夫婦は自ら傳道者を我が家に
宿して、出来る丈よく待遇したのである。

然し聖靈の働く處には、惡魔も非常の勢で働く、よい麥の中にも黒麥がある。綿
羊の群にも山羊や狼がまぢる。

斯て此夫婦の骨を折た、此群にも恐ろしい狼信者がまぢへられた。

狼の嫉妬は恐ろしく募つた。

來る傳道者も、來る牧師も、始の中は喜んで幸子の家に入出入する、卒直ではあるけ
れども感情的である、兩親は彼等に少しでもよくない事があると遠慮なく忠告する。
これが彼等を多少でも不愉快にする頃には、狼は恐ろしい勢で若い傳道者や牧師
を、此全く神に仕へて居る家庭から奪ひ去てしまふのである。

約二十年の間、此つらい経験をなめさせられた此家庭は、二度と牧師の爲に余
り熱心に好意を持ぬと決心した。

先の牧師に少しの過失があつた時も、眞意ある兩親の忠告は、却つて仇となつた。

伶俐なる狼の、巧な甘い言葉は、此過失ある青年牧師を如何に喜ばしめたであらう
此牧師は親切なる苦い言葉を捨て、甘い狼の言葉に己をくくつて、そして眞心ある
幸子の兩親を恨んで去つた。

去つた牧師は本部へも自分の信する如く報告した。次に此處に送られた今の牧師も
幹部のある人から懇々と、幸子の家庭に近かぬ様に注意された。先の牧師からもいろ

いろ注ぎこまれた。斯して此地の人となつたのである。

何年となく、幾度となく、傳道者に好意を持ち、手に手を盡して親切に世話する家庭は、たゞ誤解と悪意とを以て報ひられた。幸子の家族は二度牧師にこれ迄の様な好意を持つ勇氣はなかつた。

「みんなで勝手にするがよい。」

と、これが幸子の父の言葉であつた。

牧師も規則的に三分か五分間の訪問をする、家族も冷たくあしらつた。

然し何處かに争はれぬ暖みを牧師は覺えた。幾度も接近して見たい様な氣がするけれども此家庭に觸るなど、注意された言葉が今もあり／＼と耳底にある、彼はしづ／＼と此處を去るのであつた。

暖かい父母の膝もとや、懐かしい友達や、賑はしい都と別れて、淋しい荒すさんだ魂の戦場に立せられた牧師を、暖かく迎へてくれる人は一人もない、嫉妬のあまり暖かい家庭と、始より縁を絶てて満足して居る狼信者も矢張冷たい。しかも虐待す

るのである。

神によりキリストを友とする青年傳道者も罪の血を受けた人間である。殊に極度の切つめた生活は、彼を神経衰弱にした。靈的に力足らず、肉體の弱り果た彼は非常に寂寥を感じた。接近したいと思ふ家庭には隔の垣がある。垣のない處にはいばらがある。孤獨は彼を遂に毒婦の手に渡したのであつた。

六

一雄が死去して一週間ほど過ぎた時、牧師は毎月十五日に發行せねばならぬ月報が未だ出來て居ないのに氣がついた。

一人の信者さへ見舞てくれない一雄の病床に、牧師は約一週間晝夜兼行で親切に看とつて呉れたので彼女の両親は牧師に満腔の感謝を持つた。幸子は両親の命令で、月報の手傳ひに牧師の家を訪問したので疲れて居つた牧師は非常に喜んだ。

二人は此號は一雄さんの記念號だから思ひ切つて善の載せませうなどと、仕事をつゞけて居つたが／＼して居るうちに、日も暮れてしまつた。

忍びに忍び切つめた生活をして居つた牧師は、始めの中暫く居つた下宿屋を止めて今は素人家の二階に自炊生活をして居たのであつた。

日は暮てしまつて原稿の字も見えなくなつたけれどもランプには油もない。

「もう少しだからこれで我慢ませう」

と、牧師は短い蠟燭を提灯の中から出して火をつけた。

二人は短かい蠟燭のはの暗い明りのもとに首を揃へて原稿をあれやこれやと、いくつて居ると、とぼ／＼としたともし火の餘光は、端なくも表門の方にある障子に、二人の影をぼうつと寫した。

たつた四頁のものでも記事を撰び、弟の履歴やら葬式の様子から、教勢欄を整理するにはなかく／＼時がかゝる、殊に二人とも一雄の病床に、約八晝夜一睡もしなかつた爲、頭腦がぼんやりしてなかく／＼はかどらない。

牧師は非常の疲を満身に覺えた爲、一寸失禮するといふて、机の直側に横になつて身體を伸して居つた。

丁度その時門前に、

「先生！　／＼。」

と、呼ぶ聲がした。

先生！　／＼と呼ばれて、牧師は吃驚して飛び起きてもとの座にすはつた途端、其人ははや、ギシ／＼と階段を上つてサツト襖を開いて中へはいつた。

あまり突然のことに牧師は挨拶の言葉さへ出ない、幸子は極り悪氣に黙つて原稿を見つめて居た。

「先生もう月報が出来ましたか？」

と、云ふた彼人の目は異様に光つた、そして冷笑は彼の口もとにあつた。彼は

「また來ませう。」

との一言を残して立ち去つた。

彼男の立ち去つた後の幸子は、其時の出來事のあまり早卒なのに何となく不安と、云ふに云はれぬ侮辱とを感じさせられた。

彼の青年に去られた牧師と幸子は茫然として互に顔を見合せて居た。短い蠟燭は燃え
休んだし、暗闇は再び室内を掩ふた。

今は止むなく牧師は手さぐりに押入を開け石油を取り出してランプに注ぐのであつ
た。たつた今去つた青年の報導によつて飛んで来た或る長老が牧師の家の門前迄来た
時、今迄真暗であつた二階の障子が急に明るなつた。

「やあ果して」

と長老は叫んだ。

然し二階の二人には其足音さへも聞へなかつた。

再びギシ／＼と音がして上つて来た彼の面には冷笑が漲つて居た。

端ないはめに落ちた二人は何だか手持無沙汰になつてしまつた。

幸子の顔は眞赤になつた。耻かしいせつない思は彼女をして長老の顔さへ見得しめ
なかつた。

長老はぼんと膝を打つた。そして黙頷いた。

彼は懐から謝金と來月早々教用の爲上京する旅費の包とを出して牧師の前に置
た。

沈黙は保たれた。やゝ暫して彼は去るべく挨拶をしてニヤリつと一瞥して立ち去
つた。

七

月報の手傳ひを終つて家に歸つた幸子は悲しい思ひに胸を浸しながら一人寂しく褥
に這入つたが、幸福であるべきクリスチャン家庭に生れながら眞實に主の足趾を踐ん
として他人の想像することの出来ない様な、つらい悲しい境遇ばかりを通つて來た事
を考へると、目は段々冴えて來た。彼女の想は、彼女がやつともものこゝろついた頃の
古い／＼昔にまで立ちかへつた。

彼女はまんぢりともせず流るゝ涙を枕に潤しながら一晩中考へ明した。

今彼女の眼前には先きに牧師の家に居る時、身を縮めらるゝ様な冷笑を自分にあび
せかけながら立ち去つた青年の内田の影がぼうと現はれた。

丁の記號の這入つた靴を肩から腋にかけて、毎日幸子の家の前を往復したり。時々郵便と小さい幸子達の喜ぶ繪葉書や、父宛の手紙などを投げ込んで去つた彼の青年が、四人ほど前の牧師の時、求道者として教會に出入した事や、彼が信者になつて幸子の家に足しげく來た事や、牧師や叔母さんや姉など、一所に、秋の月を眺めながら城山に、可愛らしい賑な蟲の音を聞いたり、山の下の橋の上に立つて、河の瀬に碎ける銀色の月光を眺めながら、ト〜といふ瀬音に合せて、聲かぎり讚美を唱うた事や、其橋の上で大きな大人が鬼ごつこなどして大騒した事や、彼が一寸した事に感情を害してばつたり來なくなつた事や、復讐心の強い現在の彼の様子などがバナラマの様に幸子の頭腦に往復した。

幸子の両親は彼を愛した。彼も幸子の家族を愛した。静かで無口で美はしい信仰を持つた青年の彼は教會のみんなからも親まれ愛せられた。彼の家は貧しかつた。彼は小學教育さへ受ける事が出来なかつたが逆境の彼は信仰に於ける努力によつて段々と自己の位置を作つた。

或る年の冬、彼は新しい位置を作る爲に、ある都會の學校に己が關係のある或る技術の修業に行つた。貧しい彼の日常生活は、彼に充分の着換を與ふる事が出来なかつた。否着換どころではない、防寒の衣服さへ備へる事が出来なかつた。愛せられた家庭と、愛せられた教會と、愛して居つた天然を殘して、友のない旅の人となつた彼は賑はしい都會にあつても、なほ淋しかつた。

冬の寒さはひとしほ身に沁た。彼は寒さに堪へかねて、只一枚殘して去つた胴着を送る様、彼の年老た父に云ふてよこした。然し冬の寒さは何處も同じである。可愛い、息子の殘した、たつた一枚の胴着も今は彼の父の唯一の防寒衣であつた。父はどんなに送りたいか知れない、けれども力ない年老いた自分の身體からはなす事は出来ぬ。

これを知つた幸子の母は、氣の毒に思ひ、早速幸子の姉に新らしく胴着を作る様云付けた。姉の道子は徹夜して暖かな胴着を作つて彼の許に送つた。彼は幸子の母と姉の同情に泣いた。彼の涙は遠くはなれた學校に居る幸子の處迄も

感謝の手紙を書せた。

かういふ様にして穢のない、私慾のない、清い／＼クリスチャンラブに満た人々は此狭い土地に小さなバラダイスを形造つて居た。

此美はしい精神は教會に満渡つた。牧師も信者もどんなに繁く幸子の家を訪れたのであらう。

夏の夜の未だ更けやらぬ頃、夕餉の食を終した家族は、大急で裏の葡萄棚の下に出た。棚の下には薄べりが敷いてあつた。

葡萄棚から下つて居る、青い岐阜提灯を通して下を照して居る、青い光は青い葡萄の葉に照り返つて尙青く見えた。

下には古いテーブルと椅子が置いてあつて牧師がいつも此椅子に腰を下すと、幸子の母も兄弟もみな其圍に圓く座つて楽しさうに讃美歌を唱ふのであつた。

讃美が始まると、近所の信者の人々がそら始まつたと、皆幸子の家に飛び込んで来るのであつた。

讃美は一同を祈禱に導いた。祈禱は牧師や幸子の父に感話をさせた。期せよして此處に美はしい楽しい、打くつろいだ讃美歌禮拜の様な集りが毎夜開かれた。

幸子の父は其頃都の女學校に居つた幸子に送る手紙の終に、
「一家團樂として神に仕ふ、
樂しきかな神を拜するの家。」

と、何時も書いて送つた。

幸子は此手紙を受取る度に、故郷にある、スキートホームを偲んでどんなに泣だであらう。嘗て作文の時間に、

「故郷に送る手紙」
と、いふ題の即席文を書いて出した時に、

「故郷に歸る樂しみ如何に。」
と、さへ評を書かれた。

スキートホーム！ 幸子の頭にはこれがどんなに深く滲込んで居つたであらう、實

に此頃の幸子の家庭は地上のバラダイスであつた。

八

たまく、幸子が今夜卒業式と云ふ午後、郷里にある姉から二音信の電報が来た。幸子は此長い電報に驚いた。彼女は電文も讀まない程胸をおどらした。友達は、

「なあに幸子さん、お姉様からの祝電よ讀なくともわかかつて居てよ。」

と、云ふ

幸子は尙讀かへした。

「チ、タツヲルカケウカイニヘンジデキタスグカヘレミチ」

と、あつた。

此電文の意は幸子には少しもわからなかつた、然し彼女は非常の不安と恐怖を感じた。

彼女が胸に堪へきれぬ苦痛を感じたのも無理のない事である。此出来事こそ、遂に彼女の幸福なる生涯を一變して、苦痛と涙の生涯となす原因であつた。教會も、家

庭も遂に那落の底に沈まねばならぬのであつた。

間もなく父の一行は喜をもて幸子を音づれた、幸子は早速此電報を父と他の長老に見せた。電報の中にあるタツと云ふのは辰次郎と云ふて、最も若く、然し覇氣に富で居つた長老である。彼は教會の最も重要な地位に置かれた一人であつた。

其夜卒業式を終つて一泊した父は翌朝國許へ直行した。他の長老は東京に止まり。入院の爲に同行して来た辰次郎の妹は幸子の寄宿舎に一泊した。

幸子は彼女を呼に叔母さんを以てした。小母さんも幸子も、どうしても教會の變事が氣にかゝつた。

翌朝起ると間もなく、小母さんの子息から手紙が来た。

其中に此小母さんと當時の牧師との醜關係を面白く書いた新聞の切抜が這入つて居た。幸子は初めて電文の内容を知る事が出来た。

電報によつて呼び返された父が國許へ歸つた時は、教會の小會は早一決して、牧師

に辭任を乞ひ、牧師も行李を締めて歸京し様として居つたが尙父の意を聞くべく待つて居たのである、幸子の父は大反對をした。

「先生、貴殿が今此處を去れば、これは事實と見られます。然し私は先生の潔白を信じます、止る事はつらい。然し私は先生の楯になりますから止まつて忍んでやつて下さい。」

「今去られるは先生の爲には不利、教會は打撃です。」

と、幸子の父は力ある言葉で云ひ切つた。

狼 信者の巧なる苦心の計畫は幸子の父の一言で打破せられた。彼の狼 信者の嫉妬は幸子の家の團欒として神に仕へたり信者の繁しく出入する度毎に募つた。

彼は牧師が未亡人なる彼の小母さんに同情する事さへ嫉ましく感じた。彼は絶すよき折あれかしと隙を伺つて居ると、丁度折もよく、牧師は教用の爲 上京し、幸子の父も辰次郎も小母さんも皆 上京した。彼は手を打て喜んだ、彼の目の上の瘤は留守である。彼は巧に人手を通して遠の新聞に書せたのであつた。

爾來責任の重い幸子の父は、絶えず牧師の居動に注意せねばならなかつた、然し二人は社會の人の言葉に一瞥をも與へなかつた。否彼殊に小母さんは、人の一言一句を氣にした。けれども牧師と往復することを少しも止めなかつた。

「私共は潔白だ。神の前に耻る處はない。」
と、公言して居つた。

折角牧師の立場を作つた父は却つて自己の立場を失つた。攻撃は社會からも教會からも皆父の一身に集つた。小母さんは富豪の後家であつたから社會は父を評して慾の爲に辯解したとか、賄賂を取たとか云ふて、町の口さがないガセツブはとりごりに、云ひふらした。然し父は忍んだ。そして幾度となく牧師に忠告したのであつたが聞入れられなかつたので、感情の鋭い父は遂に立腹した。母は其様を見るに見かねて、
「貴方は潔白でも社會が煩いから、暫時お二人の間の交通や一所に歩く事は止めて下

と、懇願したが親切は却て仇となつた。

「あゝ喧しい、さう云ふ人の心が汚いからだ。そんな事を云ふと尙してやる。」
と、小母さんは怒つた。

こんな事から牧師も小母さんも幸子の両親を恨み、此家庭から段々遠くなつて行つた。狼信者の獲物は漸く出来て来たのである。

九

女學校を卒へた幸子が番町のある家から本郷の美術學校へ通學して居つた頃、突然この小母さんが訪れて来た。四疊半の茶の湯の室を自分の居間にして居た幸子は直ぐに自分の室へ小母さんを通した。

すると小母さんは遇ふと直に色々泣言や、幸子の両親に對する恨やらを云ふた。それからこんな事も云ふた。

「あの、外の事ではごはしねけれども、私あ道子さんを内田さんに貰つてもらはせうと思ひやすけれど、幸子さんどうでやせう？」

「先生もよいだらうと云ふんでやすが」

「まあ、道子さんが先生の奥さんになり度と云ふんでやすとさ。全くどうかして居やすよ、飛でもない事でやすよ、先生も困りきつて居やすよ。」

「で私の思ふには、道子さんを内田さんに貰つてもらへば、面倒はないんだから。」
「はあ、」

と、幸子は驚いて返事に窮した。

牧師が幸子の姉に思を寄て居た事も、病身の姉に同情して居た事も、幸子はよく知つて居つた。時々は牧師が幸子に送る手紙の中にも洩して来た。

淺間しいは人心である。昨日迄は己が意中の人として親しみ慈しんで居た道子を、牧師は彼の未亡人との事から両親に對する恨の爲に疎み去つた。そして巧に他の配偶者を與へ自分の責を遁れやうとしたのであつた。

然し世事に馴れない幸子は、そんな恐ろしい巧があるとは露知らなかつた。

「あゝさうですか、あの方は眞實に温順しい善方ですね。」

と、幸子はたゞかう云ふたのみであつた。

「あんたがさう考へるなら、私あ歸つたら早速話して見やせう。」

「私もつくづく面倒でいやになつて了ひやした、何とか片付なけりやあ仕方がない」
などとさんたく愚痴を云ひながら歸つて行つた。

山の手の町の夕方の騒々しい物聲も絶えて、たまに豆腐屋の笛の音が何處からともなく聞える。夕闇は前の窓から遠慮なく這入つて来る。お堀の松も、牛が淵の水も皆黒い闇に隠れて竹橋の兵營から聞えるラツバの音は夕暮の静かさを破つた。

幸子は何とも云はれぬ、淋しさと哀れさに目をうるませた。電車のキーツと轢る音が彼女の悲を尙そつた。

+

幾度とも數へられぬ親切の忠言に恨を買つた幸子の母は、

「用事があるから一寸來て下さい。」

と、使に呼びつけられ、何かと怖々しながら小母さんの家を訪れた。小母さんは、

「此間東京へ行つた時、幸子さんの處へ行きやしたら道子さんを是非内田さんに貰つて貰ふ様にしてくれとのお頼でやしたが、貴女のお考は如何でやすか？尤も内田さんにも頼んで見なければ判りやしねえが。」

「へエーエ、左様ですか、御親切は有難たう御座ますが、私一人では御返事が出來ませんから、何れ歸つて家の者とよく相談をして御返事致します。」

と、言ふて幸子の母は早速歸つた。

妹の癖に出過ぎたと云ふ事と、態々呼付られた事と比較的身分の下の者に、自分自身なら兎も角、他人を煩はして迄。貰つて貰ふ様懇願し様と言ふ此三つは勝氣の母をどんなに立腹させたであらう。

殊に神経質の彼女には、彼等の黒幕の仕事が手に取るやうによく判つて居た母は自分の心であるべき幸子が、此黒幕の一人であるを聞いた時に、幸子に對してどんなに怒つたであらう。比較的理性より感情の鋭い彼女の弱點は遂に無邪氣なる幸子に對して恐ろしい誤解を生んだ。

「妹の癖に姉の世話までやく、出過ぎてをる。親が心配して居るのに。」

と、これが兩親の言葉であつた。

これを聞いた道子も非常に立腹して牧師を恨んだ。

兩親は身分が卑くも、人物がよければ構はぬ。然しかう云ふ行が、りから道子を御願して貰つて戴かなくともよろしいと、兩親は小母さんの相談を素氣なく斷つた。そして遂に牧師や、小母さんや、幸子迄も憎んだ。

あゝ罪！人間の罪!!!

恐ろしきものは汝なり。

長い事キリストの教に因て教育され、清い愛に育まれ、嘗ては楽しい、美はしい地上のバラダイスのやうに見えた此社會も、恐ろしい悪魔の巧なる攻撃によつてもろくも打ち破られた。

信者となつて早二十年若くは十數年。然し彼等は眞に生れ變つて居らなかつた。凡ての人を愛した幸子の兩親は何故に最後迄愛する事が出来なかつただらう？

「汝の敵を愛せよ。」

と、是キリストの最も大切な教である、何故に彼等の爲に、心血を注いで人知す泣いて、神に祈り、最後まで許し愛する事が出来なかつたらう。何故に幸子の兩親は我子に對する絶對の愛と信任とを持たなかつたであらう。此地の信者、殊に大切な幸子の家庭は遂に恐ろしい悪魔の颶風を防ぐ事が出来なかつた。颶風は漸く彼等の家庭に吹き始めた。

狼 信者の計畫は美事に實現されて、彼の餌は益々多くなつた。

十一

嘗ては淋しい冷たい冬の旅に出て、暖かい愛と胴着を送られた彼の青年の内田は如何に幸子の姉の道子を慕つたであらう。

キリスト者の愛と眞の同情から出た彼女の行爲は若い異性の内田にとつては一種の戀と認められた。無口の温順しい彼は思ひ切つて、彼の胸中を道子に打開ける事が出来なかつた。胸に餘る彼の青春の思ひは小さい、繪はがきの百合の花や、忘れな草

の愛らしの花の中に込めて。道子の許に送られた。

此事のあつた夏、此縁談が始まつた。

彼の青年はどんなに心の底で喜んだであらう。彼は事の總ての成つた先の先迄も考へた。スキーとホームは彼の眼前に、幻の如く浮んで来る。

彼は一日千秋の思で返事を待つた。期待が大きければ大きい程、期待のはづれた時の失望は大きい、待ちに待つた縁談は素氣無く断られた。彼の失望は非常に大きかつた。

失望は恨に、恨は憤怒に、憤怒は憎みに變つた、口に出す事の出来ない彼の胸中の憤怒は焔の如く炎え狂つた。

弱者の友、貧者の助け手、變らざる愛情。是が眞のクリスチャンラブである。此力弱い一青年、然も神の前には同じ神の子であるではないが、それを卑しめ輕しめる、これ果して眞の信者？

「ナンダ、あの偽善者奴！」

青年は遂に幸子の家庭と家族とを捨て去つた。

そして先に狼信者の群に這入つた牧師や、小母さんの群に這入つた。

長閑かなりし神を敬まふの家庭。樂しかりし潔き心の友。甘かりし基督者の愛の集會。彼の青年は一瞥をも與へずに去つた。

浅果なりし彼等の生涯。彼等の生活の中心はキリストに見えてキリストでなかつた。彼等の中心は矢張己であつた。全く取去られたと思ふ罪の自己は、彼等の心の片端に押込められて居たのみであつた。

（謹慎儆醒なんぢらの敵なる悪魔、吼る獅子の如く偏行て吞べき者を尋ぬ、なんぢら信仰を堅して之を禦げ）

と、使徒ペテロは警戒して居る。

美はしかつた彼等の信仰生活にも隙があつた。一時彼等の心の中に植つけられた信仰と眞の愛とは、吼る獅子に吞れてしまつて、彼等の心の片隅に押寄せられて居た恨や、争鬭や、嫉妬はむら／＼と彼等の全心に満た。誤解も始まり中傷も起きた。丁度

夏の夕立の雲の様に。雨も降つた。電光も閃いた。雷も落た。物も破壊された。人も死んだ。

今は彼等の心中には、平和もなく、眞の愛も去つた。好意もなければ許もない。狼信者によつて教へられた妥協は彼等に美はしく甘く見えた。

然し彼等は悪魔ではなく、又狼自身でもなかつた。弱かつた彼等は狼信者の餌となつたのである。彼等は知ずして狼信者の群に入つた。知らずくの中に彼等の行爲は偽善に傾いた。

此中にあつて一人此様子を見て苦んだのは幸子であつた。幸子は両親や姉に彼等の行爲の過失を詫、許を乞ふたが誤解は誤解を生んだ。夏休に歸國した幸子は、涙の中に、誤解の中に歸京したのであつた。

恐ろしい風は尙吹き荒んだ。幸子の弟の病床にも、死の眞際にも信者として眞に同情を持つた者は、此町でたつた一家族だけであつた。姉の幸子と志を同うして家を憂へ教會を憂へて居つた弟は去つた。

事あれかしと願つて居た狼信者は、幸子の家庭に咀の風の吹いて來た事を密かに喜んだのである。

折もあれ、人もあれ、其恐るべき群に入つて狼信者の股肱の臣となつた彼の青年が、ほの暗い二人の影と、呼ばれて飛び起きた牧師の消息を、巧に誇張して彼の銀行の頭取なる長老の許にはせ參じたのであつた。

十二

月報が出来た翌朝、幸子は毎朝の様に、父や隣の少さい時からの友達であつた信者の娘を誘つた、けれども二人とも今朝は失禮するとの事であつた。

幸子は一人提灯の光に細い坂道を辿りながら城山へと急ぐのであつた。山の上には、夜露にじつくり濡た牧師が、悄然として居つた。疲れ果た彼、力ない彼、幸子はたゞ事ではないと思つた。

二人は例の様に讚美も唱ひ、聖書も讀み、祈禱もした。然し牧師は力がない、時々

吐息さへする。幸子は思ひ切つて問ふた。

「先生！どうかなさいまして？」

牧師は無言である。やゝ暫くして

「實は昨夜貴女がお歸りになつてから、例の女が來ました。私はどうかして、彼女を静かに歸さうとしましたが、どうしても歸りません。私は直に、彼女の女を殘した儘此處に來て、夜もすがら祈り明しました。私の犯した罪！」

私は恐ろしく思ひます。私には到底此處に居ては打切ることが出來ません、私は決心して去らうと思ひます。そして東京の先生に此ことを有の儘打あけ、聖職を辭し平信者となつて神の爲に盡しませう。」

「あら先生、何故そんな意氣地のない事をおつしやるのですか？ 先生はキリストの力をお信じになりませんか？、ポツロは云ふて居るではありませんか？」

（我は我に力を與ふるキリストに因て諸の事を爲得るなり。）と、此力をお戴きにならないのですか？」

「エーそれは信じます、然し私の罪は餘りに大きくあります」

「それではキリストの救は何にもなりませんわ、聖オーガスチンはどうしたのでせう？」

「オーガスチンは墮落しました、然し教育があります、熱心に祈り心配してくれた母のモニカがあります」

「先生それでは坑夫のウリーバーは？」

牧師は一寸答に窮した。

あゝウキーバー、石炭坑夫のウキーバーは教育もない。人間の犯すあらゆる罪惡は犯した。然も彼は救はれて、神の爲、世の爲に非常の働をした。牧師は多少自覺を與へられた。

然し二度頭を振た。

「ウキーバーには熱心に祈つてくれた母と妻とがあります。今の私はどうしても此儘此處に居る事は出來ません。それに此事が信者に知れたら。私は一時も此處に居

る事は出来ません。私は打ち切る爲に此地を去ります。』
牧師は再び自己の罪の恐しさに泣いた。

幸子は一人思に耽つた。

地位もあり金もあり學力もある人は誰でも喜んで助けて下さる。
氣の毒なのは此牧師である。

己が一生を神に献げて働いて居られた。一度神の膏を、ぎ給ひし者が、斯て終るべきでない。殊に單純なる美しい信仰を持つ彼、玉に瑕である。どうしても此墮落の底から救出さねばならぬ。

エス様は必ず救つて下さる。私も其お助をせねばならぬ。

純潔!!! これが自分の命である。

清い／＼過去の生涯! 自分は誰にも何も求めない。又望まない。然し己が生涯を托すべき人には清い愛と純潔な生涯を要求する。

自分の求める純潔なる生涯と清い愛とは、彼縁さんによつて備へられて居る。けれどもエス様は常に弱者の友、敗者の友であつた。そして遂に御自分の身を穢に渡し罪の爲に犠牲の死をとげられた。
エス様は己を愛する者を愛する事は税吏にも出来るかと仰られた。
あゝ自分は己が生涯の幸福を捨て、戀人を捨て、エス様に従はねばならぬ。けれども少い時からあんなに愛して下さつた縁さん、長い事御目にかゝらない間に……

これを御知になつたらどんなに悲しまれるでせう。人生の幸福は全部私から飛去てしまふ。然し自分が先生の救あげらるゝ助をした爲に、先生がよい神の使人になつて、世の多の滅びつゝある人を救ふエス様の御手傳をする事が出来たら、神様はどんなに喜んで下さるでせう。

「キリストすら己を喜ばす事をせざりき。」と聖書にあるではないか。
自分を喜ばせるより神様を喜ばせ奉ることが自分のなすべき事でせう。

純潔なる處女、これは自分の誇であつた。けれども聖ポーロは云れた。エス様を誇より外に何物をも誇なと。あゝ自分の誇をエス様に替ねばならぬ。そしてエス様の爲に生き、エス様の爲に死ねばならぬ。

あゝ自分はエス様の足跡を踏ねばならぬ。

懐かしい戀しい縁さん！幸子ははや御手紙も差上りません。もう死んだ者と思召して下さいます。

つらい〜お別を致します。

遠い〜東の空から御幸福を祈り上げます。此世の旅路の終つた時、エス様の御前に再び御目にかゝる時、喜んで御目にかゝります。

あゝお懐しい縁さん、お許下さいませ。清い愛を踏躪つてお約束を破り、あなたの御幸福迄も奪はねばなりません。けれど神様はきつと〜あなたに幸福を與へて下さいます。

神に従ふ事を喜ぶ縁さん、あなたはきつと許してそして忍んで下さいます。

私の行道は細い〜そして険しい道でせう、羸弱い私の足からはいばらの爲に血が流れませう。私の兩の袖は涙に乾く間がないでせう。けれども私は行きます。

あゝ我此世の幸よ去れ。

あゝ我誇なる純潔よ去れ。

あゝ我懐かしの友よ去れ。

残るは唯主の十字架のみ!!」

幸子はサメと泣いた。そして二度懐しい人の寫眞さへ見まいと決心した。

あゝけれども暗夜を一人行く時、いばらの道を一人ゆく時、十字架の上から射して来る尊い清い光はどんなに此世の暗路に行なやんでをる自分を柔かに暖かく照して下さるでせう。

キツト〜エス様は照して下さいませ。私はどうしても此道を行きます。

幸子は遂に決心した。

X

X

X

X

X

幸子は罪の爲に泣崩れて居る牧師の手を握つた。

「先生！私足りない者ですけれども、先生の爲に私の生涯を捧げます。」

牧師は驚いた。

「成功者や勝者に一身を捧げる女はいくらもある。けれども自分の様な汚れた者に……」

……牧師は再びサメくと泣いた。

「先生、私キット勝せてあげます。私には出来ません。けれどもエス様がさせて下さいます。」

私には約束の人がありますから、私は結婚する事を望みません。然し今の場合、私が先生を保護する爲に、一時も先生から離れる事は出来ません。

私は神の御心と信じ、約束を破つても先生と結婚しやうと思ひます。」

牧師は

「キットですか？」

「キットですか？」

と、繰り返した。

幸子は「キットですエス様の御力によつて」と、堅い決心を彼女の言葉と態度に現はした。

雪を凌いで芽を出した白梅の蕾の、まだ綻びやらののに、早馨しい香がもれて来る。

未だ開きもやらぬ清い處女のかぐはしい馨、主の足趾を歩まんとする健氣な志は、牧師にとつては實に暗中の光明である。

幸子の目から頬を傳つて居る同情の涙はほの暗い提灯の光にさへ神々しく見えた。

今迄死の如く掩つた罪の帷は捲去られて牧師は本心に歸つた。そしてつくづく過去を思い起した。

「あゝ、福音宣傳を自分の天職と自覺してより早七年、我はキリストに従ひ、此世を神の國となす爲に、我も亦十字架上に死なねばならぬと決心したのであつた。

是自分の意でない、人の勸によつて出来たのでない。全く神の示と確信したのである。信仰の基礎は茲にある。活力も茲にある。然るに悲しいかな、傳道の初陣に

於て、脆くも廢殘の身となつたのである。

「されど驚くべきは神の攝理である。有爲の青年の犠牲の死！

電光は暗黒なる彼の心に閃めいた。電流は遂に彼を生かした。

「幸子さん、あなたは私が十字架にはかない死を遂げる時にも尙ほ平然として是を見、是を忍び、最後まで清き神の使人として忠實である爲に祈つて下さる事が出来ますか？」

「此決心がなくては私の内助者たる事は出来ません。

「十字架！是は精神上の事はかりではありません。貧に、餓に、裸に、迫に、困苦に憂慮に、牢獄に將た肉體の十字架に……」

「私の此身は八つ裂にさかれるかも知れませんが、あなたは忍ぶ事が出来ますか？」

「エー。出来ます、必ずエス様の力によつて」

と、幸子はキツパリ答へた。

牧師は幸子の両手を握つた。

「私は必ず残る生涯を神に献げます。

自分の罪の償ひの爲に、此地の爲に盡します」

二人は涙ながらに祈つた。

十三

酒の中に漬つて夜も日も明した彼の醫者が、不思議な事からキリストの教を知つて新らしい命に生きた、其翌年彼の妻は女兒を分娩した。彼は非常に喜んで之こそ眞に神に祝福された者である。此子の前途には神の祝福が待ち受けて居る。どんなに幸福の生涯を送り得るだらうと、夫婦は雀躍して喜んでそして幸福の上の字を取て幸子と命名したのである。

彼の醫師は直に彼の山奥にある、恩人である知人に使を馳て此由を報じたので、此知せを受て直に御祝ひに來た知人の杉村は未だ生れて三日目の赤ん坊の幸子を、彼の腕に抱いて、

「ほうこれはよい赤ん坊ぢあ、どうも女兒の子の様ではない。なか／＼逞しひ顔をし

よる。この凛々敷目、どうやら家の縁に似て居る様ぢあ、どうも新生命に生た時に生れた子供は容貌から違う、のう佐久間さん。」
「之も皆あなたの御蔭です。僕は此子の前途がどんなに幸福だらうと思ふて幸子と命名しました。」

「うゝんそれは善い名ぢや、私もな女兒ぢやと聞てたから愛子かとも思ふたけれども愛子は余り有觸て居るから、幸子がよいなと思ひながら來よつた。ぢやで私が改めて幸子と命名させて貰をう。」

「それは思はず二人の意志が素通しましたなあはゝゝ」

「どうぢあ佐久間さん、家の三男の縁も私の新生涯に入つた時の子ぢや、あれは他の子供とは違ふ、此赤ん坊もさうぢやし、之は何かあやかつた事が有かも知れない。之は大きくなつたら是非家の縁の嫁に貰うとしやう。」

「中々貴下も氣が早いぢやありませんか、僕はそんな事は絶対に反對です。折角きめて置たつて當人同志が却つて迷惑するかも知れません。まあそんな事はよしませう

「それはさうぢあ、けれどものう私はな、あの縁を自分の救はれた感謝の記念として神に献け、立派の牧師にするつもりぢあ、此赤ん坊として普通の子供とも違ふ、貴下の新生涯の記念ぢあないか、あんたも感謝の意を表はす爲に神様に献げてはどうぢあのう佐久間さん。」

「それは賛成です、では兎に角さう云ふ考で教育する事にしませう。けれども當人等の爲によくはないから、時期の來る迄は當人等には知らせない方がよい。」

と、こんな會話がかはされて、彼の縁と幸子とは兩方の父親の意志ばかりの約束をしたのであつた。或る日東京の或る宗教學校の中學部を終つて、試験休に歸郷した歸途幸子の家に寄た縁は、無邪氣に遊んで居る幸子をからかつたり、英語の讚美歌など歌つて聞せなどしたので、幸子も喜んで縁さん〜と親しむのであつた。其無邪氣の愛らしさが妙に縁をそゝつた。

家に歸つた縁は父の泣く様にして勸める神學部への入學をも堅く拒んで、彼は高等學校の第三部の競争試験を受け首尾よく其秋入學した。彼は拔群の勢を以て高等學

校を卒へ、帝大の醫科に入學した。

其翌年のお正月のある日、縁は芝の山内にある、叔母の處へ年始に往つた。そして丁度來合せて居た幸子とばつたり會つた。學生上りの叔母は久しぶりに友達が出來た様な氣がして何時迄も二人を歸さない。其内に日が暮ってしまった。

「今日は余り遅くなつたから幸ちやんを私が學校迄送らなければならぬけれども、今夜はお客が來るので外出が出來ない、氣の毒だけれどもお前の直近くだから幸ちやんに氣を付て一處に連て行つて學校迄送り届ておくれ。」

ど、叔母は縁に頼むのである。夕食を濟した二人は、お餅やお菓子などお土産に貰つて叔母の家を辭した。

短ひ冬の日はとつぶり暮てしまつて、粉糠を散した様に細ひ雪が淋しい山内の林中迄舞て居る。そして遠くから響いて來る身に沁る様なアンデレ教會の夕の鐘は其寒さうな雪や梢を震はして居る。

幸子は寒さうに襟巻に首をすくめながら縁の後について暗い道を辿るのであつた。

「幸ちやん」

と、縁は突然後を振り返つた

「僕ね、すつと前から一度あんたきりの時に聞て見たい〜と思つて居つたのだ。けれども今日迄其折がなかつた。今日は不思議ない、時が出來た儘に神様が導いて下さつたのに違がない。

けれどなんだかきまりが悪いなあ」

「どうして？」

「もう云はうか、實はね去年僕のお父さんが死んだらう。あの時に僕だけ呼で云ふのはねエ、

幸ちやんが生れた時にね、僕の親父がお祝ひに行つて、そして幸ちやんのお父さんとあんなを僕の……分つたらう。」

「でねー僕もあの中學を卒業して歸つただらう。あの時から君を本當に愛し出したの

だ。それであなたのお父さんがお医者さんだから、あなたもお医者さんが好きだからと思つて、お父さんの云ふ事を聞かないで高等學校へ這入ってしまったのだ。處かあつて聞けば、もうとつくに許嫁になつて居たのだつて、僕は本當に嬉しかつた。今でも嬉しい。

「幸ちやん、あなたは僕の奥さんになるのはいやか？お医者さんは好だらう。」

「あら私お医者さんは嫌いよ」

「でも僕は好だらう。」

「あたし緑さんは好きよ。」

いつの間にか幸子の肩に手をかけながら熱心に話して居つた緑は急に嬉しさうに幸子の両手を握つた。

「幸ちやんちあね、あなたは學校を卒業したら僕の奥さんになるんだよ、なつて呉れるね？」

幸子は緑に両手を握られた儘、緑の顔を薄青い瓦斯燈の光に見上げながら無言の儘

黙頭いた。

水色の大きいリボンを掛けて、後の毛を肩から前の方へ下て、緑を見上げた幸子の目は憎いほど愛くるしかつたので緑は思はず幸子の手に接吻した。そして彼の腕を襟卷の上から幸子の前へ廻して、幸子を自分の胸に抱占た。幾年かの望を適へられた緑は雀躍して喜ぶのであつた。

「あたしそんな事すれば嫌いよ。」

と、十五になつても無邪氣の幸子は緑がどんなに深い心から云ふたりしたりするかわらなかつた。彼女は別にそんなに耻かしいとも思はずに、小さい子供のまゝ事して夫婦になり合様な氣分で、直黙頭いたのであつた。

然し二人の間は段々こくなつて來た。緑は寄宿にあつて自由に外出の出來ない幸子に、絶えず小さい可愛い、マダムとして手紙を送つた。

緑はそれから三年目の幸子が十九の六月優等で大學を卒業した。學資に不自由のない彼は其九月直に獨逸へ留學したのであつたが、其時も緑は去年の春女學校を卒業し

て、本郷の美術学校の西洋畫科に入學して居る幸子に、

「幸ちゃんも學校でも卒業して畫も熟達したら伊太利へお出で、僕もあちらへ行つて一生懸命勉強して幸ちゃんの來るのを喜んで待つて居るから。時々は繪はがきでも送つてよこすがよい。段々進歩するのを僕も見ればそんなに嬉しいか知らない。それが幸ちゃんの化身さ」と、幸子も

「きつと行きますよ、伊太利へそれから巴里へもねー」と、約束したのであつた。

十四

嘗て平和なキリスト者の家庭と學校に育つた幸子は、社會の内容を少しも知らなかつた。

美はしく見へた家庭も、内へ這入れれば案外に穢ない、家庭がよいと思へば周圍が悪い。周圍も家庭もよいと思へば其家庭が移る。彼の女は新らしく住居を移したり、又

世話になつてゐる家庭の人と一所に引越たりして、東京中をあちらこちらと流浪した東京にあつて絶えず幸子を苦しめ、彼女の立場を失ふ様にして居つた従妹の冬子は國へ歸つても巧に幸子の兩親に幸子を中傷するのである。一度誤解の中に首を入れた兩親は、卒直な有の儘の我子の幸子を信せず言葉巧な上邊の溫柔い姪の冬子の言葉を信じた。

誤解は誤解を生んだ。彼女が郷里より來て居つた中學生に對する真心こめた親切迄驚くべき誤解の種となつた。之を耳にした父は、烈火の如く怒り、お前の様な者は最早子でもない親でもない、と云ふ恐しい勘當の手紙を送つた。それからは學費もばつたり來なくなつた。幸子は自分の目的を達する爲に、或は家庭教師となり、或は大商店の販賣員となり、甚だしい時は、父の厄介になつて成功したある商家の店員となつて女中の病氣の時などは未明の三時頃から起きて、馴ない幸子には大きくて容易に自由にならない様なお釜でお飯炊などして二十人の家族の賄を、一人の手に引受ながら學校に通學した。けれども幸子は決して他人を恨まずに神の自分に與へ給ふ鍛練と

思ひ人知れず涙を呑み一言の辯解もせず忍んで其儘四年を過した。其間に幸子は二度程歸郷した、けれども彼女は苦痛と悲哀を増すばかりであるので、歸るに歸られず唯兩親の誤解の解けるのを待つて居たのであるが、此の渦の中にあつて一人幸子を理解し敬愛して居つたのは弟の英雄であつた。

突然、夏休に歸國した冬子が危篤だから直歸れとの電報が弟から來た。彼女は其時急いで歸國したのである。

幸子と弟の英雄は信仰も失ひ、虚榮にばかりあこがれて居る冬子の危篤を知つて、どんなに心配したであらう。

二人は向ふの山の中腹にあるお寺の假傳染病院の病床に、高い熱で苦しみがいて居る冬子を絶す見舞うて、眞に救を示し、彼女の確信を促がして居た。

或日教會の歸りに例の様に冬子を見舞ふた、二人は山寺のきだはしを下り小川の一木橋を渡つて、細い畦道傳に何か話しながら青い稻に半身を埋めて、其中を縫うて行くのである。

「お姉様、絶望だ！」

と、突然云ふた弟の目には涙が一ぱいであつた。

「何故？」

「僕は彼女の意識のある中にどうかして彼女の悔悛を促がさうとした。然しもうだめだ。あゝ脳症を起して分らなくなつては折角お姉様に歸つて戴いた甲斐がない。」

「そんな事があるものですか、人間の無意識の中にも神様は働いていらつしやるではありませんか、案外病氣がよい方に向ひ、我に歸つた時は、冬子さんの精神も醒るかも知れませんか。私共は其爲熱心に祈りませう。」

「然しお姉様、全快否少しでも快方に向へばよいけれど、若あの儘死んでしまつたらどうでせう、それこそ彼女の滅亡です。僕は僕の家庭から假令一人でも滅びの子は出し度はありません。僕は其爲に苦しむのです。」

「さうねー。」

と、幸子も之には深く考へさせられた。そして憂は二人の面に現れた。

熱かつた眞夏の日も彼の山の端に隠れて卵黄色を流した様な西の空から射してくる日没の餘光は焼きつた畦道の畔の細やかな流れの水に頂低れた草の葉末にたゆたへて居る。土用央に秋風が吹くと云はれて居る高原の眞夏の夕暮、何處からともなく、寒い様なそよ風が、今しも穂を抜き始めた青い稲田の上から吹いて来る。二人は無言の儘、諏訪神社の森の中を通つて町の方へと急ぐのであつた。森には騒々しかつた蟬の聲もばつたり止んで風にそよぐ木の葉の音が淋しく聞える。

十五

家へ歸つた一雄は無言の儘自分の室へ這入つた彼は眼前に死が迫つて居る冬子に同情を持つた。彼は眞の救なくして此世を去らねばならぬ哀れな冬子の爲に、自分の一身を捧げて彼女の回復を祈つた。

「神よ冬子の病を癒し給へ。御心に適はば我が命を取り去り給ふとも、彼女が爾の救を味ひ、爾の命に生くる迄、彼女を此世に長らへしめ給へ。」
と、彼は血も滲まんばかりの汗を流して熱心に祈つた。彼の頭髪は逆立ち、彼の目

から流るゝ涙は激しく机上に落ちた。

唯事ならざる様子を襖の隙より見て居た母は驚いて彼の側に行つた。

「まあ、そんな祈をして、神様は祈を聽て下さいますよ、そんな無責任の祈をしてはなりません。お前は家の大切な身ですから」

「イ、エ、無責任ではありません。私は覺悟して居ます。」

と、一雄は唯一言かく答へたのみであつた。

翌日彼は病床の人となつた。病魔は恐るべき勢をもて彼を襲ふた。純なき信仰と世俗に依れる信仰との相違より起る、幾多の波乱は彼の病床を見舞ひ、切る事の出来ぬ骨肉の間にも激しい信仰の争が起つた。愛子の臨終は信仰の戦の巷と化した。父は彼を親不孝者と呼んだ。一雄は神の意に従はんとする愛子を己が意の儘にせんとする父を悪魔の様だと叫んだ。

一雄の母が

「モリヤの山に於けるイサクに對するアブラハムの様にあなたも一雄を全く神に献げ

て下さい』

と、父を勵ますと、招きに應じて来て居た醫者の川邊は、

『昔と今とは違ひます、昔は昔、今は今、今は醫術の世の中です。』

と、遮ぎると、

神に全く任せて、そして醫術に頼つたらよいではありませんか。』

と、牧師は云ふた。幸子も母もこれに同意した。

不思議なる一雄の病は、彼の周囲の者、殊に父の信仰に依て病狀が色々に變化するのであつた。

「お父様、あなたが全く神様に僕を獻げて下さるなら、僕の病氣は直るかも知れませ

んと、迄一雄は云ふた。

ん』

と、迄一雄は云ふた。

信仰の戦は尙激しくなつた。一雄は死の間際迄、己が信ずる處を主張し、衰へたる

を起し、曲れるを直くし、誤れるを正し、然も弱者の爲に眞の救を祈つたのである。

そして彼は、

『冬子さんはきつと直ります』

との、一語を残して此世を去つた。

榮光は彼を受入れた。最も信仰の厚かつた彼の母は、天開け、愛子の魂を受け入れ

し榮光を目のあたり見た。彼女は己が最も愛する一雄を己が手より取去られし瞬間、

聲高らかに神に感謝した。

『神よ此卑しき婢にあなたの愛兒を托し十數年の間教育を許し給ひ、今又、かゝる美

はしき信仰を以て榮光の中に、爾に返し奉る事を得しを感謝いたします。』

と、一雄の父は室内の明るくなつたのを見た。けれども榮光を見る事は出来なかつ

た。

泥中に落ちて頼る處のない牧師は、一雄を唯一の柱と頼んで居つたのだ。其一雄は今

彼の手から取り去られてしまつた。彼は失望の極、思はず聲を上て泣いた。今迄胸の

張詰て居た幸子も貫泣をした。

「先生も幸子もなんですか？ 今は大切な時です。泣く時ではありません。」
と、幸子の母は嚴然と云ふた。

斯て一雄は一同の祈と讚美の中に、此世の旅を終つて天の郷里に歸つたのであつた

十六

一雄の幸子に對する信任は厚かつた。幸子は彼を愛した。一時信仰のだれた一雄は幸子の熱心なる祈と、牧師の懇切な導によつて復活したのであつた。

其一雄の最後の一言

「お姉様、キリストの爲に生きて下さい」

と、幸子は心よく承諾した。

「きつと生きます主の爲に、どんな苦しい道でも行きます」

と、彼女は去にし最愛なる弟に確く契つた。幸子は忘れ様としても忘れる事が出来ない。其一雄が死んで幾日もたつない内に幸子は牧師の内情を詳しく知つたのである。

弟の今際の言葉に多少氣付ないでもなかつた。けれども神の聖い使ひ人である故

師が、是程淺ましい淵に沈んで居るとは思はなかつた。

深い／＼淵に沈みつゝ行く牧師は助を呼んで悲鳴を上げて居る。之を聞いたのは自分

より外には誰もない。之を救ふ爲に自分も亦命を捨ねばならぬ。彼女はつく／＼考へた。

「自分の一番懐かしい學校も去らねばならぬ、音樂も捨てねばならぬ、今迄の友とも

別れねばならぬ。派手な面白い過去の生涯からも去らねばならぬ。否それにも優つ

て自分を幼ない時から愛して呉れた戀人さへも捨ねばならぬ。あゝ幸福な生涯と痛苦

の生涯。容易の生活と困難の生活。讚美の境遇と嘲笑の境遇。廣い平の道と狭い險

しい道。峯の櫻と谷の百合。

自分は峰の櫻になるよりかも、人の知れない奥山の谷間の蔭に咲く小さな堇の様に

静に然も人知れず苦しんで自分の使命を全うすればよい。

十字架の道。困難の生涯。涙の谷。是が主の私に授け給ふ杯である。

どんなに／＼苦くとも飲ほさねばならぬ。

斷腸の思ひは彼女の胸を躍らせた。涙は瀧の様に彼女の頬に流れる。彼女は全身を震はして泣いたが、遂に決心した。

『主に従ふより外はない。』と、

ちからたのみ、

ちるにまかせ

我と道を、

ゑらびとらし

行く手はたゞ、

主のまに〜

ゆだねまつり、

正しく行かん。

と、純潔なる彼女は、純潔なる愛と、心と、過去を持つた、彼の約束人を捨てた。

そして泥中にある牧師の爲に、自分を捧んと決心したのであつた。

けれども境遇を異にし、家庭の事情も相違せる牧師と幸子との結婚、到底成立する事は出来ない。幸子の両親も許すとも思はれぬ。親類は嗣子を失ひし家庭に、幸子の婿養子を迎へよと奨めるのである。殊に牧師が此處に赴任する時、人の噂に家庭を誤聞した牧師の恩人の夫人が、幸子の家庭の者と決して決して結婚してはならぬと、堅

く禁じたこの事である。

幸子の両親も、始めは教會の爲に幸子を献げ度と云ふ考から、近くにある女學校へもやらすに、わざと遠くにある宗敎學校に入學させたのであつたが、彼女の趣味は美術にあつたものだから、段々派手な方へ進んだ。其道には絶えず信仰と世俗との衝突があつた。其上幸子の両親の期待も俗化して、全く神の者と爲すよりは、此世の成功者になる事を望んだ。弟の死の間際の時さへも、早幸子は父と激しい信仰の争ひをしたのである。

幸子は非常に激しい信仰上の争闘と、苦心と努力とがなければ、到底自分の望を遂行する事の出来ない事をよく知つて居つた。

誤解の内にあつても幸子の純なき信仰と、強い主張とは美はしい犠牲的精神とをよく知て居つた両親は、最愛なる一雄を取り去られし事に因て、幸子に對する誤解を一掃した。

それで幸子が一雄の遺志通り教會内にあつて、牧師の片腕となつて、教會の爲に盡

したら、此衰退した教會も慥に回復する事が出来ると思つた。

母が幸子に東京の住居を引上げ、兩親の許にあつて、淋しい父を慰め、又教會の爲に盡力する事を望むのに、父も同意した。

自分の願ひはもうとうに兩親の望む様であるけれど、どうして其道を取らうかと苦しんで居た幸子は心の内に非常に喜んで直に兩親の言葉に従つた。

彼女は東京の住居を片付ける爲に、牧師や長老と一所に上京する事の許を兩親に願つた。

教會の信者の大部分が余り同情を持たない時、萬難を排して一雄を親切に看とつて呉た其美はしい行爲は、兩親をして牧師の人格に對する一點の疑をも入れさせなかつた、兩親は幸子を一人上京させるよりも、牧師に托する方が遙に安全だと信じて、彼女の願ひを許したのである。

翌日一所に上京する筈であつた長老は、田舎から來る爲に時間が遅れて一番列車の間に合なかつた。端なく幸子は牧師と二人で上京したのである。

十七

八月の末に弟の電報で急に呼び返された幸子は四十日振で再び上京した。上野のステーションには牧師の友達で此夏幸子の郷里に避暑に來て居つて、幸子の歸國と摺れ違ひに歸京した村田と云ふ神學生が迎へに出て居つた。

たまく、幸子の郷里に遊んだ村田を牧師はどんなに喜んで迎へたであらう。牧師は自分を理解する一雄と三人づれで、毎日山に登り河に遊んだのであつた。

平原に見る事の出来ない山河の激流は轟々と絶えず巖石にぶつかつて、白い泡を吐いて居る其凄じさ、人生の途上にあつて、弱れるを勵まし、倒れたるを起し、眠れるを醒し、止まれるを叱咤する様である。

三人は毎日此河の堤防傳ひに、あらん限りの聲を絞つて、神の大能を讚美するのであつた。彼の友人の村田は彼等の讚美歌の先生であつた。斯て月餘の避暑の間睦び合つた此友垣は、遂に離れる事の出来ない天の御國に迄結ばれてしまつた。

久振で遇た牧師は、夕飯をすます爲に三橋の近くの料理屋に二人を誘ふので、こん

な處に馴れない幸子はおづく二人のあとを付いて二階へ上つた。牧師は興奮して居るので、話が段々進むにつれて聲が高くなる。氣が附て低くなる、けれども又直に高くなる。三人の前に置かれたお膳の上の物が冷えきつても話は未だ休まない。側に聞いて居る幸子は唯沈黙の儘、時々ハンケチに涙を拭ふばかりであつた。三人は給仕の女に促がされて冷たい汁を啜りながら冷きつた御飯を喰べ終つた。

懐かしい弟の臨終を追懐した幸子は、もう胸が迫つて食事は咽を通らない。漸やく茶碗の御飯だけを濟した。

それから三人が料理屋を出たのはもう十一時過であつた。幸子は余り遅いので、一時間もたゝねば行けない自分の住居に今頃一人で歸れないし、それとて保證人の先生の家は尙遠いので困つて居ると、牧師は

「大變失禮しました、自分の勝手ばかりして、

「こんなに遅くなつてお困りでせう。今夜は私の家へお宿り下さい。」

幸子は

「それでも」

と、躊躇つた

「狭い處ですけれども家の者も僕を信じて居ますし、それに田村さんやなんか、始終來て宿つて居るのですからかまひません」

と、云ふのである。田村と云ふのは幸子と郷里を同じくする女で今は此牧師の世話で或る裁縫女學校へ通學して居るのである。

幸子は何やら氣も進まないけれども、こんなに遅くになつて何處へ行く事も出來ない。それに將來自分の両親や兄弟として侍づかねばならない人に、遇て見たい様な好意から、牧師の言葉に従ひ、一處に電車に乗つて、三十分程で目的の停留場についた。二人は電車を降りて、とある横丁の薄暗い路次を通つて、幾つも曲つて狭い溝板傳ひに、長屋の一番奥の家の前に立て、牧師はもう休んで居る家の者を起した。幸子は心の中に突然歸宅した我子にさへ驚であらうに、年若い娘を連れて來た牧師を家族の者は異様に感じるであらうと心配するのであつた。然し別に嫌な顔するでもな

母はいそ／＼して二人を迎ひ入れ、近所の蕎麥やから暖かな温飩など取つて呉れた

十八

暫らく自分の教會を去つて、魂の激しい戰場に立された幸子が、東京の自分の教會の禮拜に出席したのは、上京して三日目の日曜であつた。

弟の危篤を知つた幸子は、早速自分の敬愛して居る祈の人である神山牧師に此事を報じ弟の病氣の全快を祈つて下さる様書き送つた。返事は早速來た。真心こめた同情の言葉と、全き信仰に就て書いてあるヘブル書の第十一章と第十二章とを熟讀含味する様に書いてあつた。

此同情ある神山牧師と教會員とは非常に喜んで幸子を迎へた。人数の少ない教會、然し其中は眞の兄弟姉妹又親子の様であるので、幸子は漸やく自分の家に歸つた様な気分がした。

禮拜が終ると神山牧師は幸子の側に來て、

「どうです幸子さん、疲れて居るだらう、けれど午後から大會の聖餐式に行う。そし

て石山君に一雄さんの臨終の様子を會衆に話して貰ふといふね。

「さあ行う。早く行かないと遅くなるよ。」

と、せき立られて幸子は疲れて居ながらも神山牧師と一所に教會を出て、山の手行の電車に乗つた。

電車を降て少し行つて曲ると、向ふの方から一人の青年がにこ／＼しながら此方へ急いで來た。それは幸子と堅い／＼約束をした彼の青年牧師の石山である。

幸子から一雄の臨終の光景と、其美はしい信仰の戦の様子を聞いた神山牧師は彼の石山を見て非常に喜んだ。

「丁度よい處だ」

と、牧師は云ひながら、此方へ近づいて來た石山に聲をかけた。

「石山君、今日は是非一雄さんの事を大會席上で話して貰い度い。」

「森山君もそんなに云ふんですが。」

「それだから是非話すとよい、皆なの爲になるから。」

「それではさうしませう。」

と、石山は答へた。そして三人は一所に大會 席場なる教會の門をくゞつた。

教會の内には早多くの人々が満ちて居た。其多くは日本全國から集つた牧師や長老である。定刻の二時が來ると集りは開かれた讚美歌や祈禱や聖書朗讀や説教や、二三の人の奨励の後に聖餐式が嚴に守られ、熱心の祈や告白もあつた。

やがて神山牧師は立上り彼の石山を招いて會衆に紹介した。石山の信仰は非常に燃て居たので、彼は熱心に語り出した。

「『平和の死』之が今迄の基督者の最後である。然し最後迄信仰の爲に戦ひ信仰を全ふし、死の眞際迄他人の罪の爲に憂ひ苦しみ、己が命を献げて其救の爲に祈る、之全く犠牲の死、之キリストに生くる者の最後である。之全く私の光であり、私の救の導き手であります。』

と、暗黒にあつて光明を見とめた牧師は非常に喜び、早く鋭い語調で熱心に狂へる如く語つた。

會衆は非常に感じ入つた。一雄を知つて居る神山牧師はわざ／＼幸子を會衆に彼の死せる青年の姉として紹介したので、會衆の中には態々幸子に挨拶を求めに來た者さへあつた。

神山牧師は再び幸子を自分の教會へ連れ歸り、そして其夜臨時に青年會を開かせ、其席上で一雄の死の眞際の有様と、彼の美はしい犠牲的の死とを語らせた。

彼の青年牧師も非常の熱心と感謝とを以て之を遇ふ人毎に語つたが、彼の先生であり先輩である上田牧師は

「なあに一青年の死、それが何だ。」

と、彼は冷笑した。そして青年牧師を馬鹿狂氣と罵しつた。

十九

或る日大會の歸りに一所になつた石山は幸子に

「矢張當りました、お母様は偉いですな。」

と、云ふので、

「なにがですか？」

と、幸子は牧師の突然の言葉を訝つて、問ひ返すと、石山は一通の手紙を出て幸子に渡した。其封筒の裏には小會書記川邊としてある。幸子は手紙の中身を出して讀んだ。

教會は段々不振になつて来る。衰へた財政は先生を聘する事も出来なくなつた。甚だ勝手であるけれども早速辭して貰ひ度と云ふ意味を、何やら御世辭たつぷりに長々と認めてあつた。

「本當に當りましたのね！」

「エ、何事も神様の御心です神様はよい様に導いて下さいます。私は是から秋山さんへ行って、色々よく相談して來ます。」
と、石山は幸子と反對の方へ別れて去つた。

一雄の病床に一週間晝夜兼行で看つた事が、彼の川邊の嫉妬をどんなに起させた

か知れない。そして幸子が月報の編纂の手傳に行つた夜の出來事が教會の彼の一部の者に猜疑を起さしめ、牧師辭任問題の最もよい口實となつた。其上二人が急に一所に上京した事が、彼等の疑問を眞實にした。

此前の牧師の時に、男女間の問題で苦しめられた教會員が、之を心配するのは無理もない事である。一度怖氣の付た彼等は、到底幸子の清廉なる精神を理解する事が出來ないばかりでなく、牧師に不信を抱きながらも、牧師の蔭に横たはつて居る彼の罪惡を明白に知すに、何か有事故だけを感知して牧師に對する信任を缺て居つた信者はさてこそと騒ぎ出したのである。

二人が上京した其日の午後、小會は幸子の父に秘密で彼の川邊の家を開かれた、彼の川邊の口實はかうであつた。

「多くの羊を牧する牧師が、其總てを置いてたつた一人の青年の爲に、八晝夜を費したる此不公平なる行爲は、牧師として爲すべからざる事でありませう。牧師たる者は凡ての信者に對して公平が最も大切な徳であります。其上牧師の幸子さんに對する此

頃の態度がよろしくない、のみならず一所に上京する事などは甚不都合であります。諸君、私は到底之を看過する事は出来ません。」

と、之を聞いた一同も川邊の意見に同意したので、早速相談は一決した。

一、牧師に辭職勧告をする事。

一、幸子の兩親に幸子の不謹慎なる行爲を忠告する事。

と、そして早速辭職勧告状は彼の小會書記の川邊の手より牧師の許に送られたのであつた。

彼の夜、牧師の家を訪づれて、猜疑の目を以て二人の様子を目の當り見た。彼の長老の辰次郎は早速小會の使者として幸子の家を訪づれて、幸子の行爲を批難し忠告した、幸子の母は平然として、

「他の子供なら兎も角、幸子には決してそんな事はありませぬ。」と、斷言して長老の忠告を跳付たので、長老は空しく歸つた。

二十

一家に頻死の病者を二人も持てる幸子の家庭は、何人あつても未だ手が足りない。殊に犠牲の死を遂ぐる爲に、最後の信仰の戦を闘はねばならぬ一雄には、實に多くの援兵を要した。彼は一時も牧師と幸子を彼の側から離さぬのであつた。

幾度ともなく一雄の臨終の報を得て、彼の遠い山寺から人力車で馳付た父と、真暗の中の細い畦道を雨に濡り濡ながら跣足で飛んで來た母とは、又もや冬子の頻死に苦しむ迎へを受けて、夜中に又彼の山寺へ走らねばならないのである。

真情に富んだ彼等夫婦の愛子と愛姪に對する愛は何れも軽くはない。今にも此世を去らんとする愛子を殘して去る兩親、殊に母は本當に心許ない。それで親切に看とつて呉れてゐる牧師に何時でも一任して去るので、牧師も今は去らうとしても去る事が出来ないのであつた。こんな時にこそ信者一同が先を争つて來て呉るのが當り前である。然し敵を赦す事が出来ない彼等は見舞ふ處ではない。却つて親切に見舞ふ牧師を批難するのである。

誤解のうちにあつた幸子が、或る夏休に歸つた時、冬子の事から川邊等の父に對する仕打に就て、非常に立腹して居つた兩親に向つて、敵の爲に祈つて上て下さい。そして赦して上て下さいと、兩親の前に手をついて潜々と泣いた幸子を、感情に熱し切つた母が尙誤解して

「此子は他人と一處になつて私共を苦しめる。」

と、幸子を誘ふと、氣の短父は早彼の憤怒を腕力に訴へるのである。

漸やく怒り狂ふ兩親の隙を狙つて裏口から跣足で逃げ出した幸子は、千切かゝつて居る左の袂をふら／＼させながら、夢中で彼の懐かしい小さな妹の墓へ急ぐのであつた。

未だ二十にも満たない幸子は、悲痛の余り真夜中に一人静かに、十三年前美はしい信仰を以て此世を去た。小さい妹の石碑の前に跪いてさめ／＼と泣きながら祈るのであつた。泣て／＼泣抜た幸子は、大きな聲を立て此苦痛の中から逃れ出る事の出来る様祈つた。そして

主よみもとに

ちかづかん

のぼるみちは

十字架に

ありともなど

かなしむべき

主よみもとに

ちかづかん

と、唱ふた。其聲は眞暗な墓の森から、夜の静かな空氣を傳ふて、田の眞中にある別荘の椽に涼んで居た長老の耳に這入つた。

「不思議である、どうも幸子さんの聲の様だが、今頃お墓で、どうしたのだらう」

と、云ひながら彼は早速提灯に火をともし一人で暗いお墓へ急いで來た。お寺の長い切石の上を通つて來た辰次郎は、お寺の門前を右へ曲つて高い鐘樓の下迄來ると薄氣味の悪い様な、生温然風は墓の側の桑の葉をそよ／＼とさせると思ふと直に辰次郎の頬をスツト舐るのである。

「幸子さん／＼僕は辰次郎です、どうして今頃こんな處に居るのです。」

と、何やら氣味悪げに彼は提灯を高くあげて幸子を呼ぶのである。祈りと讚美に心

を静めた幸子は、自分の最も敬信して居る辰次郎の聲を聞き喜んで飛で来た。

「また御両親に叱られましたな。」

と。辰次郎は幸子のいちらしい姿を見るなり云ふた。

「エ、い。」

と、幸子は唯答へるのみである。

「まあ何しても遅いから私の家へお出でなさい。」

「實はお伺ひしたいと思ひましたけれども余り遅いものですから。」

幸子は沈黙の儘、本宅の方へ行く辰次郎の後に従つた。そして間もなく奥の一室へ通された。

「一體その様子はどうしたのですか？」

「何でもないのですけれどもあの冬子の事から。」

「また誤解ですな、もう僕も困ります。」

「どうしてもあの先生の事と叔母さんの事が解ないうちは」

「そ、そ、それです、實は先生も妹ももう誰の云ふ事も聞かないのです。私はもう一度理性にも富で居られ、何もかも一番よく理解して居られる貴女から、御両親に願つて、注意して戴き度と思つて居たのです。御両親までさうでは實に困りますな。まあ然し御両親です。今によくなくなるから忍んで居らつしやい。兎に角今夜は女中に送らせますから。」

と、彼はこんなな幸子をよく理解して、親切に勞はり慰めて家へ歸した事もあつたのに、たつた二年前迄は信仰も厚く、人並はづれて理性もあり、常識に富んで居た辰次郎は、此町の人々の斡旋で、此町の銀行の頭取になつた。謙遜で才氣に満ち、同情に富だ彼は町のどの人にも信せられ敬せられ親しまれた。けれども善い者には蟲が付き易い、彼は商賣上の關係から度々料理屋に足を運ぶ様になつてから、お交際に飲む酒の一杯は二杯となり、二杯は三杯となり、一合は二合になり、果はお酒ばかりでない賤しい浅ましい女を迄彼の周圍に近づけるので彼の賤業婦等は才もあり財もあり地位もあり容貌も卑しからぬ、彼の頭取を非常にもてはやした。彼は段々と其陥穴に

落ち行くのである。

それが遂先月の始の聖餐式の折、彼は珍らしく教會の禮拜に出席して、平氣で晚餐式のパンと葡萄酒を飲んだ。側にあつた一雄は身を震はして彼の行爲を恐れ、牧師の不行届を嘆いた。

こんな様にして知らず／＼泥濘の人となつて居る彼には、牧師や幸子を攻めたり、批難したりする事は出来ない筈である。けれども人は不思議の者であつて、自分が卑しければ卑しい程、穢なければ穢ない程、人の卑しいのを氣にしたり、人の純潔を疑ふのである。

彼の牧師と幸子とは遂に此等の人の疑的となつてしまつた。一度誤解の幕を打破られて明くなつた幸子の母には凡ての事が手に取る様によく分るので、母は全く幸子の純潔を信じたのであつた。

二十一

大會に出席するよりも、もつと大切の用務を帯びて上京した石山は、大會席上

で久し振に會つた森山に自分の心中を吐露し、幸子との結婚の成立に盡力して貰ふ様に頼んだ。

石山の同郷人で竹馬の友である森山は、石山の性格も家の事情もよく知つて居つたので彼は喜んで媒酌の勞を取る事を約束した、彼はある専門學校を卒業すると間もなく司法省の官吏になつて、今では其重要な地位を占て居る。

二人は之を如何にして成立させ様かと苦心した末、何を置ても幸子の父の承諾さへ得れば事は勝利であると氣がついた。

森山は早速幸子の父の最も信頼して居る。然も幸子の東京に於ける保護者である、神山牧師に事情を打ち明け、父の許可を得る勞を取つて貰ふ様に頼んだ。

絶えず幸子の身の上を心配し、よき縁談あれかしと祈つて居た神山牧師は、兩の手を擧て賛成して喜んだ。そして直に國許の兩親に彼の青年牧師石山の要求を申込んだのである。

郷里にある幸子の兩親が、彼の辰次郎の忠告を跳付てから二三日して、東京の神山

牧師から二人の縁談の手紙が来た。父は幸子が生ると間もなく共に神に献げ様と約束した其縁が、自分の目的を變じて高等學校に入らうとした時も、縁の父の杉村と悲哀にくれたのである、一層あの事を話して思ひ止まらせてはと云ふ杉村の言葉を遮ぎつて、それでは献身するのではない。幸子の爲に思ひ止まる事になる。幸子をそんな餌にしては神様に申譯がない、もう祈るより外に道がないと云ふた位であるのに、其幸子の父も其後段々俗化して、世俗的に地位も得、物質も與へたかつたので、無一物の牧師、然も問題の人である石山に娘を呉れる決心はどうしても出来ない。父は吐息してためらつた。すると側に居つた母は

「此間の辰次郎さんの事もあるから私も随分困ります。けれど縁さんもあんなになつてしまつたのに幸子だけは献身すると云ふのですもの、それに幸子の事ですから云ひ出したら聞きますまい。之を許さねばどんな事になるか知れません。あの子の事ですから無茶の事はしません。きつと何か深い／＼考があるのでせう。許してやつて下さい。」

と、父を促がした。之を聞いた父は幸子の性格や、是迄の彼女の行爲に思ひ及んだ。

「よろしい」

と、父は點頭いた。そして直に承諾の手紙を認めて神山牧師に送つたのであつた。それから結婚の相談を受た先輩の秋山も、石山の堅い決心の到底動かす事の出来ないのを知り、不承不承に承諾した。そして石山の辭職問題や何かを片付ける爲に、其月の神嘗祭の日此縣の一部の信徒大親睦會が開れるを幸ひ應援を與へ信者との意志の素通を謀る爲に出張する事を約束した。

森山も彼の先輩と同道して兩親に會たり、話の都合に依ては同道する秋山に司式をして貰つて。石山と幸子との結婚をもさせる様取極られた。石山は大會も終り大切の要務もほゞ片付たので。其月の中旬上野から終列車で自分の任地へ歸つたのであつた

二十一

「そんな不節操な腐つた根性の女があるものか。」

「本當に幸子さんにも似合ないぢやありませんか、此間も杉村さんから長い事音信

がないが、若や病氣でもして居んぢやないかと云ふて來たのですよ、で主人からお國に御病人があつて歸られたと申てやりました。あのお柔いお心のある方をさう容易く捨るとは余りではありませんか。』

と、半年ばかり同棲した濱町の家に荷物を取に來た幸子が、彼の杉村との約束を破つて、石山牧師と結婚する様になつて、郷里へ歸るからと聞た角村の夫婦は自分の娘の不貞操をでも詰る様に、口を極めて幸子を怒罵したり、云ふて聞せたりして居る。

上京の際新しく仕立て貰つた、紫の矢筈のお紹の羽織の袖は、幸子の目から流る涙に縮んでしまつて赤い紋羽二重の裏が表の方へはみ出して來た。けれども幸子は何と云はれても無言の儘兩の袖を顔にあて、泣いて居るばかりである。

「泣たつて仕様がなないぢやないか、一體どうしてそんな腐つた根性になつたんですか？ 一雄さんが死んだらもつと立派になりさうなものだ。」

と、角村はなかば責る様に、なかば冷笑する様に云つた。

「さつきお話しした通り弟が死去してから私の心が變つたのですの。」

「それぢやあ、あんたは杉村さんを本當に愛して居なかつたんだね。」

「イ、エ、私は愛して居りましたの、けれども私には緑さんよりもつと愛して居つたものがあります。私には神様よりも緑さんを愛する事は出來ません。其神様の御命令なら、私はいやでも從順に從はねばなりません。」

と、幸子はきつぱり答へた。

「それぢや僕はもう何にも云はん。君の勝手にするがよい。」

と、角村は不平らしく云つた。

「けれどもお可愛さうなのは杉村さんですよ。私人事でない様に思ひますわ。何とかならないのですか？」

と、夫人はまだ未練あるらしく云ふた。

「世間はどんなに私を不貞操な女と笑うでせう。そして緑さんは意志の弱い女と罵るでせう。けれども私はもう何にも申しません。私の心を知て下さる方は神様より外にはないのですから。」

と、答へた幸子は絶へ入るばかり泣入つた。

「どんなに人に罵られ笑はれ責られても、私は神様に従はねばならない」と、確く決心した自分には世の嘲笑や迫害は苦しくない。けれども角村の叔母さんが云ふて下さる様に、私も本當に緑さんの事が苦しく思はれる。今どうして居らつしやるだらうけれども、之が私の十字架、私の飲ねばならない苦い杯である。」と、考た。涙に泣きくづはれた幸子も少しは思ひ直して、ハンカチで目を拭きながら顔を上げた。

「本當に小父様のおつしやる通り私は今考れば緑さんを何よりも愛して居なかつたのですわ、私は緑さんよりも神様をよけい愛して居たのです。それだから私は一番愛して居た神様の方へ参ります。」

と、幸子にはつこり笑つて角村の夫婦を見た。

角村と云ふのは幸子の小さい時傳道師として幸子の郷里に一夏を過した事がある。それが其後金儲に志し兜町に通ふ様になつてからは、めつきり信仰の方から遠ざ

かつてしまつた。夫人も非常に心配して何とかして夫を元通りに直さうと苦心するのである。

處が或る時此家を訪づれた幸子がよい住居がなくて困ると云ふ言葉を聞いた夫人は自分の援兵でも得た様に喜んで幸子に自分の家に来る様に勧めた。幸子は角村の家はよいと思ふけれども場所の餘りよい處でないので少し躊躇したがこれを相談した保證人の神山牧師は直に賛成した。

「彼處は貴女の爲にもよいし又奥さんの信仰の友達にもなれるからよいでせう。」

と、云はれて、自分の住居に苦しんで居た幸子はやうやう此家に移たのであつた。子供もなく寂しく暮して居る夫人は、天真爛漫な幸子を真から愛した。幸子も圓滿な夫人を心から信じて緑の事までも何やかやと、相談するのであつたのに、それがたつた二月ばかり歸國して居る間に全く變心して歸つたので夫婦は非常に驚きもし怒りもするのである。

幸子は覺悟はして來たものの思ひ切れない緑を芥種の様な信仰を以てやうやく思ひ

切つたのであるのに、こう不遠慮に罵られては、どうやら後見度い様な思ひが起きるそれに縁が夏休に獨逸の田舎を旅行した先先をカメラに入れて持ち歸へり丁寧に現像した美しい寫真や、有名な畫家の手になつた畫などの送つて來た儘のを目の前につきつけられては幸子は身も世もあらぬ思ひに胸を締らるゝ様な心持がする。

彼女は幾度も思ひ迷つた。遂に譯がわからなくなつて瞑目したまゝ深く考へ入つた

「神様と戀人、どちらが重いだらう。前者か？後者か？」
こう考へて來るとどうしても、前者の方が彼女には重かつた。
幸子は再び決心して笑顏を作つて角村夫婦に答へたのであつた。

二十三

前後を通して約八年間住み馴れた東京を去るのは幸子に取ては一大英斷であつた。彼女は一番親しくして居つた友達の二三を音づけて、別れを惜んだ。

彼女は市外のある處に高莊な建物と廣い立派な庭とを持つて、其中にお姫様の様に大切にされて居る和子を訪れた。

「和子さん、私はもう暫く御目にかゝる事が出来ませんの、私國へ歸りますから。」

「どう遊ばして？御國へ御歸りになつても又時々御出でになればよいではありませんか？」

「でも私他所へ嫁かなければなりませんの。」

「では彼の御方が御歸り遊ばしたの？」

「イ、エ」

と、云ふた幸子は、眞紅になつて俯向いた。

「それではどう遊ばしたの？」

「實は弟の遺言もありますし、それに私も神様に従ふ道と信じますから止むを得ず杉村を捨てましたの」

「まあー」

と、これを聞いた和子はあきれて後の言葉も出なかつた。

それもその筈である和子の十七の時約束して直に獨逸に留學した工學士が日本へ歸

る船の中で頓死した。それで和子は、十九の時から約六年後の今日迄、幾多の降る様な縁談や、又他に嫁ぐのがいやなら養子をと云ふ両親の切なる望も退けて亡き人を忍んで、一人寂しく暮して居るのである。

其寂しい和子が或夜讀書に倦んで徒然なるまゝに窓打ち開けて外を眺めて居ると、たつた一軒をいた先きの小さな家から、静かなピアノの音がもれて来る。何だか聞いた様な曲であると思ふて耳を澄すと今迄静かに流れる様な曲は俄に賑かな早い曲に變じた。

和子はやうやく思ひついた。

「あゝあの有名なベトーヴェンの月光の曲である。」

と、ピアノの音は曲が一切れになつたかと思ふと又始まる。終つたかと思ふと又繰返される。

和子は其熱心さに感じた。もう夜も更けて一時過ぎである。十五夜にも近い秋の月は、冴へて冷たい様な光は遠慮なく和子の室の中に流れ込む、窓際に座つて彼のピアノ

の音に聞とれて居た和子は急に物寂しい哀れさを感じ、友の戀しさに袖を濡すのであつた。

それから和子は毎夜々々彼女の室の窓を打開いては誰とも知れないピアノのすさびに耳を傾けるのであつた。

或る日幸子が畫靴を肩から脇に掛けてステーションのプラットホームに立つて居ると、紫紺縮緬の被布を着た令嬢がつか／＼と幸子の前へやつて来た。

「誠に失禮で御座いますが貴女様はあの私共の直ぐ御近所の中川様に御出でになるお嬢様でいらつしやいますか？」

あの私はお宅の直ぐ側の松平で御座いますが、私毎晩貴女様のピアノを御聞して居りますの、御熱心でいらつしやいますこと。誠に突然で失禮で御座いますけれども私共にもピアノも御座いますし、私も一人淋しく居りますから、是非これから御遊びに御出で遊ばして下さいませ。私一度御伺ひして御願ひし度と思ふて居りました。」

此處に越して來てから余り近所に友達を持たない幸子が、いつも此家の前を通る度に洩れ来るビヤノの音を聽ては『どんな人だらう。』と考へるのであつた。其人に今向ふからこんな丁寧な言葉を掛られると、幸子も何となく其人が懐かしかつた。そしてそれから一週間程過ぎて幸子は彼の令嬢の家を訪づれた。長い事ビヤノの音で互に知り合つた幸子と和子とは直に本當の仲好になつた。それから一週間に一度は屹度幸子が訪づれては聯彈をしたり話したりして一日を過すのであつた。

彼のオールド、フオークス、アット、ホームやスキート、ホームやケンタケ、ホームやローレライの聯彈はどんなに二人で和子のビヤノの上に彈じられたのだらう。ビヤノで結ばれた二人はもう何でも兩親に話す事の出来ない事迄も話し合つた。

その和子にも幸子は今度は眞の事情を打ち明る事が出来ない、幸子は自分の願ひなる迄は二度會はない決心であつた。

「私の心の中はどなたにも解りませんのよ、神様の前へ參ります迄私 はもう何にも申しません。」

もう之が長い御別れかも知れません。」

と、幸子は涙をハンケチに拭ひながら云ふた。

「私にも何だか解りませんの。けれども御手紙は屹度下さいませね。私も必ず差上げますから」

「では私も御手紙を差上ります。どうか私の事も御祈の端にお加へ下さいませ。」

と、二人はこんな取止りのない話をして別れたのであつた。和子に別れを告げて出た幸子は門を出るとほつと吐息して

「和子さんもさぞ私を不貞の女と御思召てどんなに心の中に賤まれたであらう。」
と、思ふとやるせない思ひが、思はず胸へこみ上げて來て又も涙を拭ふのであつた。

二十四

懐かしい友の和子と最後の袂別をした幸子は、再び甲武線の電車の人となつて、暗い四谷のトンネルを通つて櫻の葉の水に寫つて居るお堀を眺めながら市内に歸つて來た。

そして彼女は長い事御無沙汰して居つた母校の門をくゞつた。學校には幸子の同級生が皆先生をして居るので、幸子は冬子の病氣の様子や暫らく保養の爲に休學させる事や荷物の始末などを其人々に托して、それから色々弟の臨終の様子などを話した。普通の學校とは違つて信仰上の事に重きを置いて教育された先生や生徒は、外部の人々よりもより多く幸子の話を理解するのであつた。

「まあ長いお別れだから、献身して新しい生涯に入る門出に懐かしい寄宿舎の御飯をたべていらつしやい。私共も貴女の門出を祝ひますから。」

と、云ふ舎監の親切の言葉に幸子は久し振に學校の御飯を大勢の生徒や先生と一處に戴いたのである。

幸子は休みに残つた僅かばかりの生徒だけで年越蕎麥をたべたり、上級の人たちが元日のお雑煮やお汁粉の喰競をしたり、町の人々が眠らずに忙がはしく働いて居る大晦日にかかるたを取つた事や、三月の休みの楽しい汐干や、早くお休みに歸りたさに毎日夕御飯がすむと、あちさゝの花が咲たかごうか見にサンマーハウスの側迄走つて往

た事が思ひ出された。紫陽花の花がどんなに懐かしい花だか知れない。其紫陽花の花が咲くともう直に夏休が来るのである。

幸子は幾度もこの紫陽花の花の咲くのを待て夏休に歸つたのであつた。其紫陽花に次では芝生の廻りの垣に咲て居る可愛らしい香の強いハネサクルである。始て學校に入學した夏の夕暮一所に散歩して居つた上級の生徒の一人が此花を一つ取ってくれて。

「そら羽根の様でせう。これはハネサクルと云ふ花ですよ、よく覺へて居らつしやいと、親切に教へられた事なども思ひ出された。幸子は暫くして學校の友達にも最後の別れをしたが何だか此儘死で行く様な氣がしてならない。

幸子は停留場迄送つて来てくれる在學當時の仲の好かつた友達と一所に門を出た。

「私ねー結婚するのよ」

「あらさう誰と？」

「今の國の教會の牧師と」

「さう。それはよかつたわねー實は私のエンゲージメントも傳道者よ。骨が折るけれ

「ご尊い務よねエ、私 もこんな喜ばしい事はないの、私の組の者が段々献身するから。」

「だからもう暫くは學校へは來られないの、もう長いお別れよ。」

「思はず二人は手を握つた。」

「幸子さんいゝのよ、身體は別れて居ても心はねー共に神様の前にねエ」

「きつとねーお願だから弱い私の爲に祈つて頂戴ねー」

「エーきつと。」

と、二人は握つて居る手を尙堅く握つて振つた。幸子は間もなく來た外濠線に乗、友達と別れて下町の賑かな角村の家に歸るのであつた。

遠く市ヶ谷の高臺の士官學校から響いて來る喇叭の音は夕方の寂寥をました。走つて來るかと思ふと止まり、止まつたかと思ふと數へ切れない幾多の人を降したり乗たりして又走る。幸子も其電車の人となつたのである。車内には色々の人が居た。勤め人らしい人も居る。労働者らしい人も居る。學生も居る。女學生も居る。幸子は色々

思ふた。

「此車中に居る人は皆平和と喜が心の中にあるのだらうか？あの勤人の家庭は幸福であらうか、そして歸つて行く主人を喜ばしく迎へるであらうか？あの労働者は幸福だらうか？家に病める妻や小供がないであらうか？あの學生や女學生は皆東京に両親が居るだらうか？遠い／＼田舎から來て此賑かな東京の中にでも淋しい夜を過すのではないだらうか？」

嗚呼！私の働く處は田舎ばかりではない、人の居る處は何處にてもである。私は眞實に理想的な家庭を持って、家庭の不平和に苦しむ人や、苦痛に泣く労働者の友達ともなり慰め手ともなりたい、そしてあの若い東京に家のない青年や女學生等の眞の同情者となり、両親の愛に優る暖かさを以ていたわつてやり度」

などと幸子は一人でそれからそれへと考へるのであつた。電車は程經て水道橋外へ來て止つた。又多くの人が下りると一所にごや／＼人が這入つて來た。一番後から背の曲つた、丈の卑ひ駝背の青年が跛を引きながら這入つて

来た。袴の腰板の邊に大きく溜が突出して腰板が妙に傾つて居る。彼は背延びしてやつとの事で釣革へぶら下つた。直側に腰を掛けて居た幸子は氣の毒に思ひ、すつと立つて其駝青の青年に、

『どうか此處にお懸遊ばせ。』

と、聲を掛た。彼の青年は何と思ふたか。非常に不愉快の顔をして幸子を睨付た儘知らん顔して横を向ひてしまつたので、幸子は何となく氣まじりも悪いし、情なく思つた。そして、氣の毒に思ふてした小さい親切は却つて彼の僻だ青年を餘計僻せたことを知つた。彼の青年は自分の身體を侮辱された様に感じたらしい。側に居つた労働者らしい大男は相手の顔を見て笑ひながら折角幸子が彼青年に譲た席にごつかり腰をかけた。

彼の青年は矢張やつと届く様な釣革につかまつて苦しそらにぶら／＼しながら行くのであつた。幸子は再び考へさせられた。

『たつた身體の不具にさへこんな人に人の心が僻む者を、精神的の不具や病や不満に苦しむ人の心はどんなであらう？』

と、こんな事を考へて居る中に電車は早駿河臺下に來た。幸子は乗換へる爲に電車を降りた。

二十五

さつき通つて來た砲兵工廠の前などは電車に乗る人の山を築いて居つた位なのに早此處迄來ると夕方の忙がしさうな賑さが段々落ついて來てはや電車の中の人も少なくななり、自然と外に立つて電車を待つ人々も少なくなつて來た。

幸子はぞつとする様な木枯嵐に首をすくませながら電車の來るのを待つて居ると、駿河臺の方から大股に走つて來た大男が

『やあ佐久間さんぢやないか？』

と、聲をかけた。

『あら先生、暫らくでした。御變りも御座いまんか？』

『あゝありがとう。』

「先生、私色々御厄介になりましたたけれども、今度國へ歸る様になりましたして近い中に歸國いたしました、御目にかゝりに御伺ひしなければならぬので御座いますけれども、これで失禮いたします。」

「さう。」

と、先生は吃驚した様に云ふたが、

「なほに身體は離れても神様の前に心さへ變らなければかまひやしない」

と、云ふた先生の顔の何處かに憂ひがあらはれた。幸子はさつき友達と別れる時云れた、

「身體はどんな遠くに別れても心はねー神様の前に」

と、云はれた、時は「眞實に」と點頭いたのに、同じ日の殆ど同じ位の時に同じ様に「身體は離れても神様の前に心さへ變らなけりあい」と云はれた先生の此言葉は妙に幸子の心に響いた。然し問ひ返へすのも妙だし「エー」と其儘點頭いてしまつた。「なほに便利の世の中さ、又手紙でも下さい。僕は時がないから失敬するサヨナラ」

と、元氣よく又錦町の方へ走り去つた。幸子は何だか妙な氣がした。

「一體先生は何と思ふて居らつしやるだらうか？ 何だか妙だけれど、私の心の穢ないせいだらうか？」

と、こんな事を思ながら幸子は今自分の前に停つた電車に乗つてその中で色々過去の出来事などを思ひ起した。

丁度幸子が女學校を卒業すると間もなく、本郷のある學校へ入學した。其年の五月頃から先生と知合になつた。先生は幸子の技術がよいので他の生徒よりも骨を折つてくれ、幸子も先生／＼とどの書を書くにも先生に相談したのであつた。

或る日學校へ行くと間もなく、學校から一丁程行つた横町の裏長屋に佗住居して居る先生の隣に居る友達が、

「佐久間さん先生のお母様が大變に御悪いのよ、危篤ですつて、」

「それでもねー先生があゝして學校へ來てしまわれてからは御病人が一人で居るのよ、眞實に御氣の毒よ、私一寸御見舞に往つて來たのよ。」

「まあさう御氣の毒ですこと。」

と、同情に富だ幸子はまるで自分の親でもあるかの様に氣の毒に思ひ、其日の晝休の時間に一寸學校を抜け出て、彼の裏長屋へ走つたのであつた。通りから一寸這入つて、ぐちやんぐした様な狭い路次を行くと一番向ふから二軒目の家に先生の表札が出て居つた。

「御免遊ばせ」

と、幸子が格子戸を開ると、早今迄學校に居られたと思ふた先生が歸つてをられた。「まあ先生、御歸り遊ばしたのですか、私御母様が御わるいと伺ひましたから、先生は學校へ來ていらつしやいますし、どんなに御困り遊ばすかと存じて一寸御伺ひしましたのですの。」

「あゝさうですか？ありがとうございます、然しもう駄目です、上つて見て下さい。」

幸子は直に上つた玄關の次の六疊の間に休で居る病人の側へ座つた。長い事不治の病に苦んだ先生の御母様はもう衰弱しきつて顔には一面に水氣が來て居る。病人は目

を閉たまゝすやゝして居るのみである。

「御母様々々佐久間さんが御見舞に來て下さいましたよ、御母様」

御母様くと呼れて病人はだるさうに目を開いて、あわい視線をこちらへむけた。そしてはつきり聴とれない様な聲で、

「ありがたう」

と、一言云ふて、また元の様に目を閉ちてしまつた。其閉ぢられたまつ毛には涙の露が宿つて居た。幸子も思はずハンケチで目を拭ふのであつた。

其翌日幸子が教室で一人きりで晝板に紙をはつて居ると、先生が這入て來て、

「やあ、昨日はありがたう。何しろあんなになつて居るものだから」

「一寸友達から伺つてごんなに御不自由かと思ふて失禮をも思はず御伺ひしましたので御座います」

「母も非常に喜んでお前も佐久間さんの様な人があるから私は死んでも安心だといふんです」

幸子はさつと顔を赤くした。何だか先生の其言葉の奥に云知らない意味がある様に思はれた。

幸子は何だか自分に野心でもあつて先生の家を訪れた様に思はれた様に感じた。

「あなたは餘り同情があり過ぎ、親切過るので却つて誤解されるのよ。」

と、何時でも友達に注意されるのであるのに、又しても自分は先生の事を自分の事の様に思ふて輕はづみにも、若い先生の家を訪れてしまつた。幸子は自分が本當に謹みが必要なと思ふて自分をせめるのであつた。

それから三日程して又前の友達から先生のお母様の亡くなつた事も、そして明日の午後葬式である事も聞いた。けれども幸子は唯迷惑さうに

「さうですか。」

と、云ふのみで、もう二度と彼の家の格子をくぐらなかつたのである。そしてそれ以後は學校へ入つても、先生とは餘り口をきかなくなつて、二人は唯沈黙の中に學課だけを習ふのであつた。

それが又突然道で遇た瞬間にも亦あんな言葉を耳にするので幸子は何とも云ひ知れぬ氣分に心を苦しめたのである。

二十六

産湯も使はずに學校の寄宿舎から社會へ直ぐ飛び出した幸子が四ヶ年間の生活、自分の前途に對する希望や、信仰生活や、獨立生活や或るは住居に或るは職業に苦戰奮闘した活歴史のある東京は幸子に云ひ知れぬ戀慕の念を起さしめた。彼女の心中には別れるに忍びない戀かしい情がむら／＼と起きて來る。

楽しい華やかな生活の裏面にある、他人に一言ももらした事のない兩親の誤解や、學費を自給せねばならぬ悲しい彼女にとつて唯一の隱家であり慰安所であつたのは彼の神山牧師の教會であつた。彼女はどんなに忙しい時でもきつと日曜の一日を教會に過した。彼女には此日が眞の安息日であり、魂の與力日であつた。

純潔で無邪氣で殆ど罪を知らない様な彼女は異性に對して實に大膽であつた。偽なき彼女の日常生活は實に彼女を大膽にしたのである。其幸子には、若い女の少ない

教會の青年は眞に彼女の唯一の友達であつた。彼女は敬愛して居つた牧師や仲のよい青年會員や、可愛がつて呉れた婦人會の人々や、日曜學校の生徒と別れなければならぬ。彼女はどんなに名残惜いか知れない。教會の一同も名残を惜んでやまない。彼等は、幸子が東京を去る最後の日曜日の禮拜後直に送別會を開いた。そして教會員一同からも、青年會からも、婦人會からも、日曜學校からも其先生等からも、それ／＼眞意ある送別の辭があつたが、其中で一番幸子の決心を堅くしたのは青年會の代表者の辭であつた。彼は

『今は我心せまりてエルサレムに往、彼處にて遇處如何を知らず、たゞ聖靈毎邑に我に示して云ふ繚綯と患難我を俟りと、然ども我は我往べき路程と主イエスより受し職すなほち神の恩の福音を證する事をとげん爲には我生命をも重せざるなり』と聖書を讀んだ。そして

『私はこれが佐久間姉に對する最も適切の聖句だらうと信じます。長い事神意に従つて進んで來られた同姉が敬愛する弟君の死に際して眞に靈的實在を確信せられ、

決心を新たにして、いよいよ直接傳道の新生涯に入らるゝは、私共の最も喜ぶ處であります。

然し姉のこれから行かるゝ道は淺薄な吾人の考へたり想像したりする様な、甘い容易い道ではありません、今私の讀みました聖句の様に困難はいやが上にもます事と思ひます。

けれども神は必ず同姉を護り行くべき道に導いて下さる事と確信いたします。そして佐久間姉も必ず總ての苦難に打ち勝つて始めかけし業を完成せらるゝ事と信じます。吾人はどうか此一言に過ぎない送別の辭が實現せらるゝ様いつ迄も此青年會の有んかざりは絶えず同姉の爲に祈ります、どうか心強く聖靈の劍と神の言葉の杖とを持って前進せられんことを』

と、述べた。

神の恵の證明者となるものが此決心がなくてはならぬと、一同も心より頷づいた。最後に幸子は立つた。

「今度私が献身する様になりましたのは、偶然の事では御座いませぬ。長い事神様が私を御召しになつていらしたのですけれども自分の頑な世俗に染みた心が従順に神様のみ聲に應じなかつたのですが、神様は痛い私の耐へきれない様な鞭を以て私を呼醒して下さいました。」

今御鄭重なる御送別の御言葉の中にあります様に、私のこれから行く道は決して容易な楽しい道ではないと思ひます。けれども神様は必ず導き支へて下さると信じます。どうか皆様弱い私を御記憶下さいまして此大切な尊い勤を果し得る様に絶えず御祈り下さいませ。」

と、幸子は懇懇に答辭した。

一同も亦懇懇に黙禮した。それから可愛らしい子供の讚美や、暗誦や、余興があつた。そして送別會が終ると可愛らしい子供等は一人一人幸子の前へ來て、

「先生さよなら、御機嫌よう。」

と、いち／＼挨拶した。

幸子は目を涙に潤ませながら、子供等の歸り行く後姿を眺めて居た。

幸子が此教會へ來る様になつたのは今から四年前の五月であつた。東京へ出て學校の寄宿舎ばかりに居て、一週間に一度外出する教會も直ぐ近くであつたのに、始めて賑やかな下町の教會に出入するのは幸子にとっては何んだか一種異様であつた。今迄は若い男や女の學生の多い教會に居た者が、青年と云ふても角帯に前掛姿のお店の番頭さんばかりが多く其中にたつた四人の學生青年があるのみで、女學生としては、幸子の外には一人もないのである。

幸子は直に日曜學校の教師に選れてそれから今日迄過ぎたのである。

幸子は子供の後を見送りながら楽しかつた過去の夢を辿つた。

「始めて此教會に來た時の事や其冬のクリスマスや、だん／＼生徒の殖て行く様子や先生の交代や、何の汚い考へも思ひもなく青年等と一所に教會の直ぐ前に止まる小蒸氣に乗つて隅田川の上流に遡上たり、品川の沖合近く迄下つたり、春も未だうら若い二月の紀元節に、遠い木根川邊まで梅見に行つた事や、青年の一人に貰つた切

符で一高の寄宿舎の紀念日に寄宿生の趣巧になつた面白い裝飾を、友達の家の老母と一所に見に行つて、もう少して潰されさうになつた事や、それから先生が講壇で熱心に説教された事などが、それからそれへと浮んで来る。彼女は眞に自分の生涯の一變期の様に感じられた。彼女は嬉しい様な悲しい様な、気分になつた。そしていつも變らない清い、親しい此教會の結を解て皆に別れを告げた。

二十七

一週間ほど前に歸つた石山牧師が「秋山さんの奥さんが貴嬢にゆつくり會つて話し度からは是非宿がけに来る様にとの事です。是非一度歸る迄に尋ねて下さい。そして貴嬢に親しく接したなら奥さんの貴嬢に對するいろ／＼の誤解も解るでせうから。」と、云はれた言葉に従つて幸子も多少は知つても居るし一二度は尋ねた事もある處から、國へ歸る前日の午後、小石川の傳通院の裏の方に住んで居る牧師の恩人の家を探ねた。夫人はにこ／＼しながら「まあよくいらつしやいました。待つて居ましたよ、まあお通りなさい」と、薩張した言調で幸子を迎へた。幸子は人の噂さに聞いた人よりも何んだか親しさうな人の様に感じた、そして導か

るゝまゝに奥の座敷へ通つた。如才なき夫人は幸子の好きな書や、音樂の話をそれからそれへと面白く持ち出すので幸子も思はずいろ／＼と話に時を費やした。「實はねー、今度貴女が石山の爲に、決心して下さつたつて、私眞實にうれしく思ひますの、全くあなたは石山には過ぎた奥さんですもの、それで私から一つ二つお話しして置き度い事がありますので、わざわざ来て戴く様に御願ひしたのですの。」と、改まつて夫人は話し出した。「あなたは石山の母にもお會下さいましたでせう。あの通りですからその物のわからない事と云ふたら、てんで理解力がないのですもの、それに家もあの通り不自由で

すし、石山も中々非常識ですから、よい時は非常によいかわり、悪くなると馬鹿に悪いのですよ。だから石山の奥さんになるのはなか／＼骨が折れますの、それでもあなたは忍耐してやつて下さいますか？」

と、夫人は念を押す様に幸子に問ふた。

幸子は二つ返事で承知した。

けれども余り境遇の違ふ幸子は容易にそれが出来るとも思はれなかつた。それで幸子も

「私始めて先生と伺つてお家の御様子を見た時はぎよつとしましたの、けれども私出来る丈けやる積りですの」

「そうでせう、あの兄がああの通りのならず者ですから。」

「ですけれどもお兄様だつて先生と血を分けた方ですから私出来る丈けやる積りで御座います。」

「そう。それだけ貴女が堅い決心ならもう何も云はなくともよう御座います。私やつ

と安心しました。」

と、夫人は答へた。

日もとつぶり暮れてしまつていつの間に降り出したか糠の様な秋雨が裏庭の芭蕉の葉にかゝつてサツ／＼と音がして居る。そして直ぐ側の傳通院で打暮六の鐘がゴーンと寂しく濡て居る空氣に響くと、本堂から聞へる讀經の聲が一と入幸子の心を曇らせた。幸子は何だか滅入る様な氣分になつた。

暫く無言で居つた幸子は夫人の勧るまゝに夕飯を一所に済して、

「ぢやあね！頼みますよ。」

との夫人の言葉を耳にしながらか此處を去つて、わざ／＼広い表通りに出てそれから道普請の處へ雨が降つてどろ／＼になつて居る富坂を控様にして下り晝間と變つて森とした砲兵工廠を右に左へ曲つて水道橋の方から来る電車を待つのであつた。

幸子は石山の母が一所に來た者が別々の家から歸國するのは背中合せと云ふて遂には別れる様になるので誠に縁儀が悪い。折角家の嫁になつて呉れるなら是非國へ歸る。

時には倅と同じ自分の家から歸つて貰ひ度いと云ふ、其望み通り出京した時始めて宿まつた石山の家に歸るのであつた。

二十八

翌日幸子が濱町の角村の宅から荷物を引取り直ぐにそれを上野のステーションに預けて再び石山の宅へ歸つた時は、日も早や暮に近かつた。幸子は石山の母の心の籠つた手打ちのうどんに暖かくお腹をこしらへ、親切に用意してあつた果物の籠などを貰つて又人力車上の人となり上野の停車場に着いたのは、もう九時過ぎであつた、

幸子は約八ヶ年間住み馴れた東京を去るのに多くの人々に送られてがや／＼した中に去り度はなかつた。彼女は彼女の約半生涯の長い年月を過ごした東京に一人寂しく静かに充分名残を惜み度いので誰にも歸國の日と時を知らさすにわざ／＼夜行を撰んだのであつたが、彼女の女學校當時から同級で幸子が今迄居つた本郷の學校へも亦一所に入學した友達の村瀬が

「佐久間さん長い御別れぢあないの、他の人はともかく私に位ひ話して下さつてもよ

いではありませんか？」

と、無理に尋ねられたので幸子も余儀なく其時を知らせたのであつたが、其友達にはやステーションに来て幸子を待て居るのである。幸子は切符を買つたり改めて先きに預けて置いた荷物を預けたりしてから改札口近くのベンチに腰を卸していろ／＼物語つて居ると、十時も間近くなつた時、入口の方から彼の駿河臺で逢た先生がこちらへ急いで来て二人の前へ来てはつたり止まつた。

「いよく歸りますな、僕は村瀬さんの小母さんから貴女が歸るので村瀬さんが見送りに行つたと聞いたものですから、時間もあるからわざ／＼御見送りに來たのです」「あら先生恐れ入りますお暇乞ひにも御伺ひしませんのに」

と、云ふた幸子は眞紅になつて下を向いた。

聴て改札口が開かれた。近くに居つた幸子は直に切符を改めて貰ふと村瀬も先生も其後からプラットホームへ出て左の方にある、新湯行の列車の二番目の客車の一番端に這入つた。すると五分前のベルは慌しく鳴た。村瀬は自分の持つて來た一口饅頭

の籠を幸子に渡して

「餘り少しですけれど、これは私のほんのお餞別よ、お小さいお弟様やお妹様に上げて下さいませ」

と、云ふた。幸子は何時迄も變らない友の心を嬉しく受けるのであつた。

村瀬の後に立つて此様子を見て居つた彼の先生は其時近くよつて窓から半身を出して居る幸子の手を握つた。

「佐久間さんこれは僕の餞別です。流車の中で食べて呉れ給へ、此の袱紗は僕の母の記念だから貴女に上げます。」

と、云ふて紫縮緬の袱紗に包んだお菓子折を幸子の手に渡した。そして名残惜しさうに幸子の手を何時迄も堅く握つたまゝ放ないのである。

突然「危ない危ない後へ下がれ」と云ふ驛夫の聲がした。列車の近くに居た人々はさつと後へ去つた。

再び響き渡るベルの音と鋭い汽笛の音と一所に流車はゆるく静かに、汽車が動くの

か外の人が歩き出したのか分らない様に動き出した。

汽車の速力はだん／＼早くなりて、懐かしい村瀬の影もはや薄くなつてしまつた。

幸子は村瀬の振て居るハンケチが電燈の光に白く見えるのと、何時迄も何時迄も石像の如く身動もせず一人寂しく立つた居る丈の高い彼の先生の黒い影が、ブラットホームの柱と柱との間の燈の下にぼうつと見えるのを見ると、なんだか分らない涙が自づと頬に流れた。

間もなく汽車は反對の方向に曲つて彼方此方に光つて居る燈火丈が寂しく哀れに、物悲しく幸子の目に這入るのであつた。

二十九

囂々と恐ろしい様な音を立て、走り行く汽車の窓際から自分の座に歸つた幸子は、先つきステーションで渡された先生の袱紗の包を開いた。中からは美味さうなクリームケーキの折と、鴿色の西洋の封筒に入れられた一通の手紙とが出た。

幸子はわな／＼しながら其手紙を取り上げた。

見やうか見まいかと思案に暮たが、何だか之を見れば自分に解らない先生の心理状態がすつかり分る様な気がするので幸子は此鶉色の封筒の口を切つた。すると中からは一枚のレターペーパーと一葉の幸子の寫眞が出た。幸子は吃驚して此寫眞を先に見た。けれども幸子は未だ嘗てこんな寫眞を寫した事もなければ又見た事さへもないのであるが慥に自分ののである。

躍る胸を静めながらつくつく見ると之は寫眞ではない、先生の手になつた一葉の幸子の寫生畫であつた。幸子は好奇心を煽られて今度は手紙を読み始めた。

「最愛なる幸子さん、僕はもう云ふまいと思ふた。然し之が此世に於ける最後の袂別になるかも知れない、だから僕に一言云はせて下さい。

實は僕も、僕の母も君を慕つて居つた。然し君には最早始めから約束された人があると云ふ事を確な人から聞いた。僕はそれ以來、貴嬢に積極的の愛を求めない。然し僕は最後迄も何時迄も貴嬢を自分の意中の人として置く。

善良の性質と泥の様な穢ない東都の中にあつて、蓮花よりもつと潔い心を持って今

日迄通して来た清麗な處女の貴嬢の將來が幸福である事は當然である。君が一生涯を托すべき夫君も必ずや親切な高潔の士と確信する。

僕は一言貴嬢の祝福を祈ると共に自己の赤心を吐露して最後の袂別をするのである別紙は僕が君を意中の人とした時から、今夕迄かゝつて苦心と愛とをこめて書いた最愛なる貴嬢の寫像である。

此手紙は讀だらむざぐにさいてあの高いく確氷の峠から深いく谷底へ捨ててくれ給へ。僕の身體と思ふて、そして忘れてくれ給へ。然し此僕の勞作と袂紗とは君が許すなら何時迄も君の手に置いてくれ給へ。

君を偲ぶKより

と、あつた。幸子は事の意外に驚いた。そして四年間の先生の苦心と氣の毒なる境遇とに同情の涙を流したのであつた。

寂しい夜の一人旅の出先の此の出來事は一晚中幸子を考へさせた。考はそれからそれへと丁度走馬燈の様に出て來るのである。

「あなたの將來は屹度幸福である。あなたの夫君は必ず親切の善い人であらうと、若しこれがあの懐かしい約束人の杉村の縁さんであるならば、自分をどんなに親切にして呉るだらう。そして將來も屹度幸福にして下さるだらう、けれども今となつては其望も絶てしまつた。自分の前には唯険しい道と、苦い／＼杯とが有ばかりである。あの教會の送別會の時の吉田さんの辭にも縲紲と患難が自分を待つて居ると云はれた通りである。

自分はあるな親切にして下さつた縁さんの眞心をも捨て、しまつた。小林先生の心にもあんな苦痛を與へて居るのである。自分の不謹慎の態度が先生にあんな感情を起させたのであらうか？なんて自分は罪深いのであらう。」

と、思ふと幸子は身も世もあらぬ心持がして、自づと涙が頬を流れるのであつた。幸子は止度もなく流れ出る涙を拭ひながら、又しも色々と考るのである。

「幾年かの前に横濱の阜頭に別れた懐かしい人が、甲板に立つて腕もちぎれさうに振つたハンケチの見えなくなつた時に母親の袖にすがつて、人目も耻す涙を流した事

や、船が黒い煙を吐きながら港を出て行つて、其煙が段々細つて、終には白い糸の様になつて見えなくなつた時の心細い氣分や、早く來い待て居るからと云はれた事や、屹度行きます伊太利へ、それから巴里へもと云ふた事や、幾度とも知れない懐かしい思ひに飛でも行き度思ふた事や、長い船の旅を終へてハンブルグの港に着た時に自分を迎へてくれる杉村の様子や、クラシカルのローマの建物や、月と水とに名高いヴェニス街の様子などが、現在往つて見て居る様に、それからそれへと浮んで來る。

それから停車場で別れた先生の様子や、あの本郷の裏店の狭苦しい暗い室に横たはつて居る、水氣にむくんだ先生の御母様や、細い目を開て「ありがたう」と云はれた寂しい其聲や。

それから二度程お世話になつた石山の家の様子や、親切に世話してくれた將來の自分の母である人の様子や、それから傳通院の裏のあの名高い音楽の先生のお隣に住んで居る石山の恩人の奥様の様子や何かが、取こめも無く夢の様に又幻の様に、幸

子の眼前に現はれるのであつた。

稍暫すると幸子は郷里の人となつた。

幸子は家の奥座敷に座つて一生懸命に石山の着物を縫て居ると、あの杉村の緑さんが家へ来て幸子の父に、

「伯父様僕は日本へ歸つて来ても、もう望みもなんにもない。こうして家によらくして居つてもつまらない、だから僕は今から伊太利へ歸らうと思ひます。」

と、云ふた。幸子の父も不憫な杉村に同情して色々となだめるのである。けれども緑は

「もう幸子もあつして他人の者になつてしまつたし、それとて他に適當の人もなし、それよりかも又今度は伊太利の學校へでも行つて勉強する方がよいから、どうしても歸る考です。」

と、云てきかない、

幸子の兩親も餘儀なく緑の言葉に任せたが父は何か思ひ迫つた様に、目に涙をため

て別れを惜んで居る。蔭にこれを聞いて居つた幸子は堪へ切れなくなつて、せめてもの思ひに緑の好きな菓子でもと思ふて、菓子屋迄飛で往つた。

すると菓子屋の主人が一つの綺麗なリネンのハンケチの包を幸子に渡して、
「之は杉村さんがお買になつて貴女が此店に来た時でよいから貴女に渡してくれとの事でした。」

と、云ふた。幸子は受取るや否や、其ハンケチの包を解くと、中には綺麗な食器が二組宛揃へてあつて、其一番下に一枚の綺麗な皿がある。幸子がまあ綺麗なと云ひながら取らうとすると、其お皿は真中から美事に二つに破れて居るのである、

「あらかけて居るではありませんか。」

「エーそれは杉村さんが態々缺てお入れになつたのです。」

そして此儘渡してくれとの事でありました
と、主人は答へた。

其お皿にはミレーの有名な晩鐘の繪が寫し出されてあつて、遠くの高い會堂から響

いて来る晩鐘の音と共に頭を垂て祈つて居る夫婦の姿は、皿の真中から碎かれて兩方に別れて居るを、そしてこれを包んであつたハンケチの角には杉村幸子と鮮に杉村の字で記されてあつた。

あゝ碎けたる皿、否破れたる戀、割れたる夫婦。否自から破りし結び、幸子は菓子屋の店先をかまはずサメと泣いたのであつた。

其時火事だ火事だ、と呼ぶ聲に幸子は目を醒した。すると幸子の直隣の郵便列車は摩擦された爲に發火して、列車中の新聞が半分程焼て居るのであつた。

火は漸く消し止められ残りの新聞や郵便物は、幸子の乗て居る列車内に積込まれてたつた三人しか居なかつた幸子等は次の列車に乗換させられたのであつた。

三十

消えては去り、去りては又閃めく千萬無量の哀情を胸の奥に秘て幸子は約半月で再び郷里の人となつた。

待ちに待つて居た母は喜んで幸子を迎へるのである。

『まあ幸子や、先生はどうなされたのだ。』

『なにがですか？』

『何がつて四日程前に一寸此處へお歸りになつて、其翌日又何處へとも云はれずぶらりと出られた儘お歸りにならないさうだ。教會の人の云ふには、多分又東京へ行かれたのだらうとの事ですからお前はよく知て居る事と思ふて、お前の歸るのを待つて居たのです。』

『あらさうですか、私少しも知りません、あの十日の夜こちらへお歸りになつてから』

は何にも存じません。』

と答へた幸子の胸には

『若しや』

と云ふ不安の念が起つた。

今朝の未明に家に歸つた幸子は、何となくろはくしてかの石山の行衛を案じながら歸りを待のであつたけれども、夕方になつても石山の影は見えない。

翌日の午後幸子が近所へ一寸歸宅の挨拶に行つた時

「先生は又東京へお歸りになつたさうですね！」

と、云はれたけれども幸子は全く知らないのだから

「何にも存じません。」

と、答へるより外はないのである。

不安の中に二日は過ぎてしまつて三日目の夕方、石山は一つの風呂敷包を小脇に抱へながら歸つて来て、其儘幸子の家を訪づれた。

「あら先生、どう遊ばしたのですか？」

「貴嬢はいつ歸りました？」

「私は三日程前に歸りましたが教會の皆さんが心配して居らつしやいます。一體何處へ往つていらしたのですか？」

「僕はあの一ちやんと同じ名の御牧一雄君の處へ往つてゆる／＼名残を惜んで來たのです。どうもよい景色ですよ、全く我國の風景とは思はれませんよ、もう見をさめ

と思つてゆつくりして來たのです。」

「まあ。」

と、幸子は云ふた。果して幸子の不安に思ふた通り石山牧師は自分の罪の爲に自分を卑下し弱い心を出して、又も此處を去る決心をして此處から八里程田舎に居る親しい友の處へ暇乞ひに行たのであつた。

「もう僕は十七日限り此處を去ります。そして東京で考へた通り北海道へ往うと思ふのです。それで一雄君にも會いに往つたのです、これは一雄君の餞別です。」

と云ふて石山は彼の風呂敷包を幸子に渡した。其中には一包の真綿が這入つて居た。あの十日の夜上野の停車場で幸子に別れて任地に歸つた石山は、東京に居つた時の元氣は何處にか失せて、唯孤獨と寂寥と過去の過失を責める思がひしと攻め寄るのみであつた。それに彼が幸子と一處に上京すると間もなく開かれた小會の議事を、立聽して居つた彼の狼信者の娘の百合子が、場所をも人をも嫌はずに喋り歩くのであつた。

二人の噂はばつと擴がつた。あの蘆花の『思ひ出の記』に娘の半襟が變ると村中の問題になるとある様に、狭い田舎の人々は、河端に行つても、井戸端に行つても、道で遇つても、お湯屋に行つても、お茶飲話に迄も石山と幸子の噂をするのであつた。東京で色々感ふた末、どんな耻をも忍んでやらうと堅く決心をして歸つて來た牧師も、今は余りの事にあきれてしまつて言葉が出ない。

『之では到底駄目である。あゝ去るべし。』

と決心した。そして漂然と家を出て、彼の八ヶ岳の中腹の靜な牧場に彼の友の御牧一雄を訪ふたのであつた。

牧場は八ヶ岳の中腹にあつた。中腹と云ふても中々高い處である、低い谷間に立つて頂を仰げば、小さな角があるかないか分らない羊の様な小牛や、生れたばかりの當歳が、高い山の頂から倒になつて下りて來ては、霜に央やけた草を夕日に暖ましながら甘さうに食で居る。それから其谷間から坂を攀て今小牛や小馬の遊んで居る頂に立つて下の方を眺めると、幾つもの重り合つた山の頂の央頃に青々とした

湖水が狭い程に廣く長く丁度魚の尾の様に擴がつて居て、其周圍にある松林は暗い程に繁つて青蒼な松の色が黒く見る。そして其中の湖水に浮んで居る小さなボートが動く度に四方に擴がる小波は夕日に照返つて黄金の波を漂はして居る。

其湖水の真中に一つの塚がある。何年とも知れない長い間の風や嵐に堪て來た一本の松がくねくねとしてまるで水面を這つて居る様に見へる。之が彼の有名な大將の武田信玄の母の墓とも云れ、又信玄自身の墓とも云はれて居る。今でも此處の湖水の側にある諏訪神社の神主は

『あの猜疑心の深い信玄は敵勢の復讐を恐れてあの諏訪湖に沈めさせたと云ふのであるが、彼は尙も屍の發掘を恐れて秘に此湖水に彼の死骸を沈めさせたのである』

と云ふて居る。眞偽は何れにもせよ其塚は此尾長湖の景色を添る大切の一つである。此高原の秋の晴れ渡つた空と、高く聳へた山嶽と、清い空氣と澄きつた水とは、此心に痛ある青年牧師を暖かく迎へ柔かく孕んだのである。彼は終日一雄の別荘にあつて、一人靜かに山と語り水と親しみ約五日間を過した。

彼は全く今の苦しい嫌な生活と、自分の汚した聖職とを去つて、此静かな天地に、自然と親しみ、家畜を追ふて暮す身となる事を希願したのであつた。

三十一

聖職に在ながら罪の淵に足を入れ、人の前に秘して居る石山の心には絶えず恐怖の念と、自分を卑下する心が去らないのである。

あの勇々しい青年の一雄の最後の様子と、

『先生！教會と家とを頼みます。』

と、はつきり言ふた、牧師に對する遺言を思ひ出すと、弱い心に沈んだ牧師は急に電流に觸た様に呼び醒されるのである。

『僕はもう最後です、先生、善き天國に行かれる様に祈つて下さい。』

と、暫らく吐絶へた息を吹き返して、我に歸つた一雄は牧師に頼んだ。

牧師は點頭いた。そして懷から聖書を取り出して

『なんぢら心に憂ること勿れ、神を信じ亦われを信すべし、わが父の家には邸宅おほ

し、然すば我預て爾曹に之を告べきなり、我なんぢらの爲に所を備に往、もし往て我なんぢらの爲に所を備は、又きたりて爾曹を我に納べし、我をる所に爾曹をも居しめんとて也、爾曹わが往所を知らまた其途を知。』

と、讀だ。

『一雄さん、あなたは今此世のあなたの使命を全うして、父なる神様の備へ給ふ樂しい天の御國へ歸られるのです。父の家には住居多しとあります。あなたは其一番善い住居に往べきであります。父なる神も、主なるキリストも喜んであなたを受入

給ひます。』

と、牧師は嚴に云ふた。そして牧師は眞血の迷る様な熱誠を以て、敬愛する一雄の魂を天の父なる神に托するのであつた。

祈りが終ると、臨終の一雄は大きな聲で

『アーメン』

と、云ふた、そして又讚美を叫んだ。

牧師は一雄の言葉に従つて讚美歌を唱ひ出した。

世にかちにしいくさびとに

さづくるはこれと

たまのかむりかゝげもちて

エスキミはまちたまふ

エスキミはまちたまふ

たまのかむりかゝげもちて

エスキミはまちたまふ

と、熱心に歌ふ一同の中には、嘔り泣の音も聞える。一所に聲高らかに唱ふて居つた一雄の聲は段々細つて、讚美が終らうとする時に、一雄の顔には黒い影が射して來た。

一雄は静に目を閉ぢて終つた。

「一雄くなんだ、そんな氣の弱い事で、先生はあゝ云はれるけれど、お前の使命は

決して終ては居ない。お前にはまだくこれから先に大きな使命が待て居るではないか、しつかりしないといけない。」

と、今靜かに美はしい讚美の中に目を閉た一雄はバツチリ大きな目を見開いて

「お父様、何故そんな事を云はれるのですか、私を全く神様に献げて下さい。」

「おれはお前を全く神様に献げて居る。」

と、父が答へると一雄は又悲しうに云ふた。

「そんな迂詐を云ふたつて駄目です、どうか彼方へ往つて祈つて下さい。」

と、望と喜を以て此世を辭さうとした一雄は、父の肉の情の爲に止められた、そ

してそれから五日間此病床にあつて、不信仰なる者とは誰とでもかまわずに戦つた

一雄の體力は段々に衰へた。然し身體が衰へれば衰へる程、靈性の力は強くなり、

遂に眞に己が使命を全うして、信仰の衰へたる父に力を與へて、此世を去つたのであ

るが、牧師は此一雄の唯一の援助者であつた。

彼が彼の信仰の勇者なる一雄の臨終に、彼の願を入れて祈つた祈禱は到底自分の汚

れた身から出た者とは思へない、彼は其祈りの瞬間、慥に眞に神に接した事を直覺した、そして始めて眞の祈の出来た事を自覺した。

彼は一種の力に動かされて、それから祈つたり、勧めたり、命令したりした。石山は罪の淵にある事を知ながらも、聖職にある牧師である自分を尊敬し、全き信任を以て自分に對した、一雄の信仰に驚かされた。

彼は全く神の實在と、キリストの救を悟り過去の罪をも忘れて、一雄を臨終に看り會堂に於ける葬式の司式をなし。斯て亡軀を葬つたのであつた。

然し彼の犯した罪は消なかつた。彼は再び己が罪に苦悶する者となつた。

彼は絶す心の中に彼の一雄の臨終に見た閃を見るけれども、又直に暗黒に返つてしまふ。

靈的活力と肉的魔力とは絶えず彼の心中に格闘する、そして稍もすると其恐ろしい肉的魔力は暗く、牧師の心を掩ふてしまふのであつた。

彼が其一雄の臨終を偲んだり、お墓に參つたり、又彼の姉である幸子に接する時は

光明の閃が彼を勵まし、彼の川邊等に觸ると暗黒が彼を掩ふのであつた。

彼は東京で別れたさりの幸子が歸國した時、又漸やく光明の閃をみとめたのであつた。

三十二

東の空がだん／＼白み出した、招魂社の芝生や、木の間から見ゆる幾百軒とも數へきれない山下の家々の家根に、初雪かと思ふ程白く置れた霜が、今しも登らうとして居る朝日にまばゆい程キラ／＼と光つて居る、石山と幸子の父は客らしい二人を供のふて、靜かに招魂社の坂を登つて行く其後を幸子は弟の潔の手を行きながら少し後れて山へ登つて行くのであつた。

六人は招魂社の鳥居の前に一列に並んで、元氣よく

此世を主にさゝげまつり、神の國となす爲には、
迫も耻も死も滅も、なにかはあらん主にまかせて、

と唱ひ始めた。

俯目がちであつた彼等の視線は段々高くなつて遂には大空を打ち仰ぎながら唱ふのであつたが、讚美が段々進むにつれて彼等の思も高く天に馳て忘き一雄の心もかくやと偲ぶのであつた、讚美が終ると、祈りは一番向ふの幸子の父から始まつて、次に石山ろれから秋山、森山、と順々に祈つた。

森山の祈りは始まつた。

父なる神様、今吾等が唱ひし讚美がたゞ口先ばかりの無責任の讚美にあらずして真に心の奥より出しものにて遂に此美はしい言葉の如き決心を徹底なさしめ給へど、祈つた、今度は幸子の祈るべき番が来た。然しいつ迄過ぎても幸子の祈の聲は聞へない、一同が待あぐんで目を上げて幸子を見た。

幸子は唯茫然と何を見入る如く、無言の儘、ちつと高い空を見詰て居つた、其彼女の頬は紅に、眼は異様に輝いて、全身は電流にでも觸て居る様に震へて居るのみで、彼女はいつ迄たつても無言である。

森山に催促されて我に歸つた幸子は祈り出した。

「愛の神様、今私共が唱ひました如く、己を全く主に献げ奉り滅行く同胞の爲に死も滅も耻も責も厭ざる心と力とを與へ給へ。」
ど、熱心に祈つた、五人は心を合せて異句同音にアーメンと云ふた。そして再び前の歌を繰返して早天祈禱會を閉じた。

すると森山は、うれしさうに芝生の上を飛びまわつて居る五つになる幸子の弟の
潔に

「坊ちゃん、あんたは何になるの。」

「僕エ僕はね？ 牧師になるの。」

「さう、では何處の教會の？」

「僕はね、お父様が毎朝此處に来て祈をするから僕はね、此後の山の一番高い處に會堂を建て、そしてその教會の牧師になるの僕は。」

「さうそれは優い。あの高い處へ高い塔のある會堂を建ると何處からもよく見わてい
ね。」

と森山が云ふと潔も

『うん』

と頷いた。

『坊ちやんきつと大くなつたら此叔父さんに話した様に此山の高い處へ會堂を建て其教會の牧師になるんですよ、よいですか』

と云ふと潔はうれしさうに

『きつと僕は建る。大くなつたら』

と眞面目に答へるのである。側にこれを聞いて居つた幸子は

『あら』

と驚きの目を見張つた。そして何事か合點したらしく點頭いた。

秋山と森山と石山と幸子の父の四人も面白さうに笑ひ話をしながら坂道を下りて行くのである。

『あゝ、よく揃ひも揃つたものだ。そら石山、森山、秋山、まあ三山だ。此山奥で三

山とは實に面白ひ。然し僕が一番適當の様だ、今は秋だ。それだから秋山は丁度よい、全く秋の山はよいね…』

『なあと秋山ばかりが適當ぢやないさ、あの向ふの山は森山ではないか、森山だつていゝさ。』

これを笑いながら聞いて居た幸子の父は

『今此處では見られませんけれどもあの森山の後の方に奇巖ばかり累積した石山がありまして、西洋の宣教師などが、わざと見物に行かれます、なあと山國ですからい

ろくの山があります。』

と眞面目に云ふので三人はドット笑つたが石山は沈黙のまゝ皆の後について山を下つた。日は今は全く彼の山の端を離れてギラギラした秋の光は目映ほど夜の間に置かれた霜に照り返つて光つて居る。そして道の直ぐ右側を流れて居る河の水は奇麗に澄んで其水際に欹つて居る城山の紅葉を水底に迄寫して居る。

昨日の夕方秋山と一所に來た彼の森山は珍らしさうに彼方此方を眺めながら

『どうもよい景色ですなあ、空気もよし、水もよしこれはよい處だ。こんな處に一雄さんの様な信仰の勇者の出るのは、當然です。僕も同名である事をよろこびます、だから僕もさう云ふ最後が遂度ものですなあ。』

と、語る。秋山は何んだか變な顔をしたきり返事もせず無言のまゝ道を行くのであつた。

幸子は小さな潔を連れて、山下の鳥居のわきから堤防の方へ曲つて流れる水に頂低れた萩の花を手折りながら、一雄の墓の方へいそいだ。

三十三

石山の最後の戦場と思ふた十七日の日曜日は来た。今朝招魂社山上で互に祈つた五人は普通の會衆よりも早く教會へ行つた。

定刻が來ると禮拜が始まつた。禮拜の後に洗禮式があつて其後に晚餐式がまもられた。

心に悶々のある石山牧師は此大切な司式者であるけれども何となく身が引けるので彼

の先輩なる秋山教師に譲らうとするのであるけれども秋山教師は

『君がした方がよいから。』

と云ふて強て石山に勧めた。

石山は三人の青年と一人の婦人に洗禮を授け、そして今度は徐に晚餐式にかゝつた。

一同がパンも頬たれ、葡萄酒も飲み終ると、彼の秋山教師は立つて懇切なる勸をした。石山牧師は一同を見て

『二三三人御祈り下さい。』

と、云ふと一同は跪づいて祈るのであつた。

すると婦人席の後の角の方に居つた女が細い金切聲を高く張り上げて丁度芝居の臺詞でも云ふ様に切口上で祈り出した。

彼の女は

『罪人なる私を』と云ふ言葉を幾度も繰返し繰返したが、一同の中には此大切な

最も眞面目であるべき晩餐式の祈りの時に、彼の女の如何にも態どらしい滑稽極まつた祈りを聞いて、もう絶わ切れなくなつてクスクス笑ふ者もあつた。

前の方をよつて此祈をきいて居た幸子は氣が氣でなく一人で胸をたごらせたのであつた。そして晩餐のテーブルの前に立つて祈つて居る牧師の顔色は眞蒼に身體は石像の如く、目を瞑ぢたまゝ身動きもしなかつた。

晩餐式が終ると總會が開かれた。

議長席についた秋山教師が

「川邊さん、牧師辭任の理由を説明して下さい。」

と、云ふと川邊は直に立つて何だか妙におづ／＼しながら

「牧師辭任の理由と云ふのは誠に簡單のもので、諸君も御承知の通り例年の爲め、不振なる我が教會の財政は到底牧師を聘する力がないのです、それで牧師も教會の不振の責を負つて辭任せられ度いこの事でありませう。」

と、説明した。

すると議長は

「では牧師辭任の理由は單に教會の財政問題に因るのでありますが諸君は此問題を如何に決せられますか？」

と、云ふと

「議長」

と呼んで一青年は起立した。

「牧師が居られてさへ不振なる我が教會は若も牧師が居られなくなつたら、なほ不振になるではありませんか、ろうなれば我が教會の前途は暗黒であります、で私は牧師辭任を絶對に反對し牧師の留任を希望いたします。」

因て私は此に一つの動議を提出いたします。即ち先決問題として財政整理の爲め献金を増加すること。」

と、云ふと

「賛成、賛成」

と、云ふ聲が方々から起つた。

議長は立つて

『兎に角、諸君今新たに出来得る丈の豫約献金をして下さい。』

と、云ふた。

役員はそれ／＼立つて少さく切つた紙片と鉛筆とを會員の一人一人に渡した。そして暫くして執事はお盆の上を集められた紙片の豫約献金増額高を讀上げた。それが濟むと今度は計算がせられた。

たつた一青年の發議に因て實行せられた献金の増加は辛うじて牧師が留任をなし得る高に達した。

議長は二度口を開いた。

『諸君今新たに豫約された献金は牧師を聘するに足りません。諸君は牧師留任に異議はありませんか、なければ皆さん手を舉げて下さい。』

と、一同は直ぐに手を舉げた。長い事問題になつて居た牧師辭任問題もやうやく留

任に一決された。然し會員の風潮の容易に我が意にならないと見てとつて止むなく一同の後から舉手した川邊の窪んだ、奥底にある目は異様に光つた。そして失望は彼の面にあり／＼とあつたが彼はなをも信する處あるらしくニヤニヤと笑つて居るのであつた。

議長は又立つた。

『諸君、此献金の中には吾人の驚くべき献金があります。新たに豫約された金額の約三分の二に達する献金は彼の石山牧師によつてなされてあります。石山牧師は實に身を以て献身犠牲の衝に當つて居られます。諸君は此の實行に富んだ牧師を敬愛し助けて教會の前途の隆盛に盡力して戴き度い。』

と、云ふた。

會衆の大部分は驚きと、牧師の行爲に對する感謝とを以つて涙を流す者さへあつた

三十四

長い事準備された信徒大親睦會は其日の午後から彼の石山牧師の教會で開催された

信徒は彼方からも此方からも集つて来て皆うれしうに又樂しうに語り合ふて居る少したつて例の様形ばかりの儀式が濟と今度は會食に移つた。會衆は自分の前に置かれたお菓子や、お壽司などを食べながら卓上の五分演説をするのであつた。

もとより田舎の小さな會堂には別に食卓の設備もなければ、うれとて外に開くべき場所もない、止むを得ず教會堂内のベンチを二つづ、向ひ合せて一側に一同が腰をおろして其向ひにいろ／＼の食物を置いて食卓に代るのであつた。

「諸君今司會者は卓上演説と云はれたけれどもこれはテーブル、スピーチではなくて腰掛スピーチですなあ。」

と、彼の東京から初めて此教會に來た森山は、如何にも面白さうに云ふのであつた一同はドット笑ふのであつたが、田舎から出て來た信者の中にはスピーチと云ふ言葉が分らずにたゞ妙な顔をして居る者もあつた。

最後に石山牧師は立つた。

「あのスキツツルは有名な風景のよい處です高原で湖水もあり山もあり、河もあり、空氣も新鮮に水も清い、ろして極平和な静かな處です、其中にあの淫猥な罪惡に満たしたジエネヴァの町があつたのです、多分此町位と思ひます。此町は風景と云ひ町の様子と云ひよくあのジエネヴァに似て居ると思ひます。その罪惡に充ちたジエネヴァは一度其町の人々によつて追はれた有名な宗教改革者カルビンに因て全く變つた清い町になつたのです、此處にはたつた一人でない多くの神を敬信せらるゝ諸君が居られます、ジエネヴァ程墮落して居ない此町の教化されん爲に諸君が全力を以て祈り且つ盡力されるならば此町は必ずや、ジエネヴァ以上の町になると思ひます。」

と、云つた。すると側に居つた他の教會の一長老は如何にも感服したらしく

「乞ふ君より初めよ。」

と、叫んだ。

一同は非常の勢で喝采するのであつた。テーブル、スピーチは中々盛んにそれからそれへ進んで終にはいろ／＼の遊戯さへ

始つた。

けれども石山牧師は無言のまゝ一人静かに沈思して居る。

『乞ふ君より始めよ。』

ど、彼は心の中に繰返した。

彼の山上で幸子に罪の告白をしてから間もなく上京した彼は、任地へ歸る前日未明に幸子と一所に狭苦しい石山の家を朝暗い中に出て、彼處此處と祈りによい場所を尋ねあるくのであつたが直ぐ近くの植物園はこんなに早く門が開かれないし、彼の白山神社がよいと思ふて行けば此處にははや何だか人の氣はいがして居る、二人は所々をさがし歩く中に一層上野の山奥へ行かうと云ふ事になつた。

幸子は様子も餘りよく知らない此邊を疲れた足を引きづりながら暗い中を石山の後をついて不忍池畔迄來るともう東の方が白くなつて來た。

『早くしないと夜が明けてしまいますよ。』

ど、幸子は心配さうに云ふた。

『もう仕様がなから彼處で祈りませう。』

ど、石山が云ふので、今觀月橋を渡り終つた二人は走る様に不忍辨天の祠の後へ廻り直ぐ水際の石垣に跪づいて祈るのであつた。

二人の祈りが終つてから石山が

『もう僕は歸るまいと思ひますそして皆の勸めて呉れる場所に場所も心も新らしくなつて眞に新らしく働いて見度いと思ひます、それで僕は北海道のある教會へ行ふと思ひますが貴嬢は一所に行つてくれませんか？』

ど、云ふど

『まあ先生はまたそんな御心になられるのですか、先生が他の所へ行かれるならば私は何もこんな思ひをして先生と御一所しなくもよいのです。あの一雄の、『お姉様、教會と家とを頼みます』との遺言がありました。そして先生にも『家と教會を』と申しました。その後で『先生を助けて上げて下さい。』と申しましたではありませんかそれだから私は決心したのでです。だから先生が郷里をお去りになられるならば私の

先生に對する事柄は無異議になります。私は如何しても先生に歸つて戴き度く思ひます。若し先生がお歸り下さいませんならば私は一人で歸つて出来る丈け弟の遺志を果します。」

「貴嬢は潔白だからかまいません然し僕の様な者が追はれた處へ再び歸るのは僕自身はよいですけれども信者の爲にいきますまい。」

「だつてカルピンは一度追はれた處へ再び歸つてあの働をして居るではありませんか？」

「カルピンと僕とは全く異ひます。純潔無垢のカルピンと罪惡の血に滲んだ僕とは雲泥の差です。」

「どんなに汚れて居てもキリストの血は白く潔くして下さるではありませんか？、さあ決心して歸つて最後迄やりませう。」

と、幸子は熱心に勸めるのであつた。

幸子は前にはカルピンを餘りよく知らなかつたけれども丁度此夏カルピンの四百年

祭があつた。幸子は其時此記念會に出席していろ／＼とカルピンの事を知つてからは折さへあれば絶えず彼の傳記を繙き歴史をあさるのであつた。そして彼の純潔なる信仰と嚴格なる主張と日常生活と辛辣なる事業とは如何に彼女を喜ばしめたであらう彼女は心からカルピンを崇拜する様になつた。そしてそれから彼女の人格と信仰と事業とは常に幸子の心中を去らなかつた。彼女は口癖の様にカルピンを繰返すのであつた。

それで幸子は石山にもカルピンの様な嚴格な信仰と主張と實行とを要求するのであつた。

然し石山とても嘗つては熱心なるカルピンの崇拜者であつたので、今幸子にカルピンを引合に出されると彼の心底に潜んで居る彼の強い信仰は電光の如く彼の心中に復活した。彼は再び決心して此處に歸つたのであつた。

それで彼は此罪惡に沈んだ此町をチエテヴァに譬へて一同の覺醒と決心を促したのであつた。それが又思はない他教會の長老から

「乞ふ君より始めよ。」

と、云はれ、又一同に喝采されたので彼は非常にうれしくなつた。そして必ずくと云ふ決心と元氣とが彼の心底から湧いて來るのであつた。

三十五

一雄の一月目の命日に幸子の宅では一雄の爲に追悼會を催して、近所の人から知己友人それから彼の臨終に携はつた總ての人々を招待した。勿論熱心な基督者で嚴格な禁酒家の家では他の家々で行はれる様な四十九日もしなければ法事もない従つてお酒も出さない。

で幸子の父は一雄の立派なる最後を遂げしを感謝する爲に、一雄に縁故のある先輩か、名士を招聘して大演說會を開く考へであつたがどう云う事情の爲か、石山が上京の折、それ／＼依頼して來た人々迄急に手紙を出して断つてしまい、竊に靜かな此記念會を催したのである。

此會の司會者であつた幸子の父は會衆一同に、一雄の臨終の様子や、彼の堅かつ

た信仰について語つたり、法事をせず追悼會を催ふした理由などを詳しく述べた、そして石山牧師に極通俗の信仰上の話を頼んだので、牧師は幸子の父に頼まるゝまゝ自分の所感を語つた其一節に

「種子といふ者は大切であります、詩の五十一篇にもある通り、我が母罪にありて我を孕たりき。」と

實に私共の罪は私共から始まつたのではなくて先祖代々の遺傳であります。それですから我々が全く潔められた時に出來た子供は、必ず立派の品性と精神を持つて居ます、然し悔いのない汚れたまゝの人の子は必ずよくはありません。それはお子様のある方が一ち一ち御熟考下されば思ひ當らるゝ事があると思ひます。」

と、語つた、すると會衆の中にあつて此話を聞いて居た例の小母さんは、すつと立つて座を離れ持つて來た聖書や讚美歌を風呂敷に包んで、玄關口に居つた母に「少し氣分が悪いから失禮します。」

と、云ひすて、歸つてしまつた。

幸子の家を出た小母さんは、自分の家の前を通り越して彼の川邊の門を潜た。

『まあ私の眞實にくやしうつて。』

『な、な、なにをしました？』

『何をつて私あ此年になるけれどもあんな大勢の前で、あんな耻をかゝせられた事は始めてでやす。きつとありや佐久間さんのお文さんが先生と腹を組んで、私に耻をかゝせたに相違ごわしね。もう私あこれつきり教會へも行かないし、献金もしやしね。』

『一体どうしたのか私には解らないけれどももどく私がああ牧師はいけないと見てどつて辭職をすゝめたのに又のろく歸つて来て、そして私共がわざと献金なども少なくて居るのにあんな献金迄してするく止まつて居るのです。』

なめに構やしません、彼も人間でさあ、兵糧攻にすりあ今に出て行きますよ、まあ暫時は貴母は献金も出さず教會へも出ずにいらつしやい。必らず僕がよい様にしま

す。』と

川邊は言葉巧に彼の女を唆かす。

小母さんは眞實にと思つて泣き止んだが、未だくやしうに、

『それでもまあ、お文さんも何處迄私を憎むのでやせう。』

『なめに、あんな者には關はない方がよいです、今に泣かしてやりませう。まあゆつくりして氣でも晴していらつしやい。』

と、云ふのであつた。

然し記念會の話を頼まれた牧師は他人を攻撃したり教へるどころではない、彼は只管自分の犯した罪について泣き悲しみ苦しんで居る。彼は今日も暗に自分の罪について語り、また告白して謝罪するのであつた。それが運悪く、一時一雄の死によつて心の解た小母さんに、自分の子供に放埒の箸にも棒にもかゝらないのがあるので、牧師が自分に當擦つたのであると邪推した。そしてそればかりでなく牧師の話は牧師自身から出たのではなく、幸子の母が牧師を唆して話させたのだらうと小母さんは考へ

た。痲癩の強い小母さんはちり／＼して来たヒステリックの彼女は、矢も楯も止まらず追悼會の座をすべらして彼の川邊の家に走つたのであつた。

三十六

一雄の葬式のおつた翌朝から、毎朝未明にはの暗い燈火が何時も變らずに彼の城山の間に自然とつくのである。

口穢ないお上さんや、町童は

「あれ狐火があゝの城山に毎朝暗い中につく。そしてぞろ／＼續て歩くのが其光に見ねる。それ啼聲が聞へる。」

と、大騒ぎであつたが、

それから少し日が過ぎると其燈火は招魂社の方へ轉じられた。

「あれ昨日の朝から招魂社の方へつく。あれは狐火ではない。人魂だ。日清戦争や日露戦争に打死した人等の幽霊だ。」

と、又々取沙汰するのであつた。

然しこれは狐火でもなければ、人魂でも、幽霊でもない。それは一雄の遺志を繼とする父や、石山や、幸子等の早天祈禱會に来る時の提灯の火であつた。

それが早天祈禱會に必ず欠した事のない幸子が東京から来た秋山と森山が歸ると其翌朝からばつたり姿を此山上に見せなくなつた。

そして山からの歸りには必ず立ちよつた、石山牧師もめつきり幸子の家を音づれなくなつて、父と一所に山から歸つて來ても、石山は幸子の父に一寸目禮して急いで歸るし、父も亦例の様に止る事もしない。

それが二十日程過ぎた或る水曜日の夕方、牧師は突然幸子の家の玄關へ這入て來た彼は眞蒼な顔してふる／＼震へながら、

「奥さん誠に濟ませんが、非常に氣分がわるくてもう動けませんから、少し休ませて下さい。實は安井さんの祈禱會に行うと思ふて出て來たのですが。」

と、辛うじて言ふのである。

幸子の母は驚いて、早速牧師を座敷へ通し急に床を延べて、牧師を休ませた。

牧師は仰向になつたなりらん〜と息をして居るのみであつたが突然

「幸子さん幸子さん、もう時間がなくなります。早く祈禱會に行つて下さいそして其序にあの安井さんの奥さんと直ぐ隣りの正雄さんと直ぐ此處に来て下さる様事詫して下さい。私が行くのですけれども苦しくつて行かれませんかから。」と

石山は云ふのである。

幸子も何が何やら譯が分らないけれども牧師の命する通り直ぐに出て行つて、安井家の別宅に正雄を問ひ石山の事詫をして今度は安井の本宅に這入つた。

「あの私には何んだかよく分りませんが、先生がお伺ひするのですけれども、今大變氣分が悪いので御伺ひが出来ませんから失禮ですけれども少し御話し度事がありますから直に私宅迄御越下さいませこの事で御座います。」

と、幸子は安井の奥さんに傳へた。

「先生は一体どうしやしたので御ざんす？」

「何だか分りませんが大變に氣分がわるくなつてもう動けないと云はれて私

共に休んでいらつしやいます。」

「あゝさうでやすか、それぢあ直に參りやせう。」

と、奥さんは急いで仕度をして出て行くのであつたが、安井家で祈禱會が終つた時勝手口の方で夫人の歸つた音がすると主人は急いで奥へ這入た。そしてひそ〜と話をして居る。

「まあ私あ先生が病氣だと思つて行やしたら、病氣だなんてまるで虚で、ほんの化病でやした。そして先生は、お文さんや、正雄の居る前で、私を悪魔だの、我儘だのと云つて私の手が赤くなる程私を叩くのでやすもの。」

と、ヒステリカルの夫人は泣きながら主人に訴へるのである。

「きつとありあ先生一人の考ぢやありやしねお文さんの指金に相違ごはしね。うれに先生の宅で先生一人の處ならまだしも。あんなお文さんの家で、おまけに正雄なごを前へ並べどいて私を責るのでやすもの。」と、如何にもくやしさうに訴へるので、溫柔しい主人も今は立腹した。

「それころ大變だ、私は行かなかつたから知らないけれどもあのおふじさんの事と云ひ今夜の出来事と云ひ、どうしても牧師がわるい、そしてあのお文さんが先生をお先棒に使つて専横を極めるのに相違あるまい。日頃川邊さんから聞いて居るのは事實である」

と、彼は信じた。

再び出て来た時の主人の顔には憤怒の情がみなぎつて居つた。うして間もなく歸うとする川邊に耳打ちして引き止めて、事の顛末を話した。處がこれを聞いた川邊は心中で手を打て喜んだ。遂に我が思ふ壺にはまつた。此家こそは自分の射落すのにとんなに骨打つたか知れない。長い事射て射て、射ぬいた此家もやうやく止めを刺す事が出来た。

彼は言葉巧みに家族を揺ぶつた。家族の土臺である主婦がぐらくして居るのだから、他はわけもなく動くのであつた。

三十七

幸子の出て行つた後の牧師は高度の熱に、顔を眞紅にし「ハア、ハア」と呼吸さへ苦しさに喘ぐのである彼の全身は油汗が滲んで頭からは湯氣が立つて居る。

彼は仰向に寝て、両手を胸に置き、口は堅く閉ぢ目を大きく開いて天井をちつと見詰たまゝ身動きもしない。

「先生、如何なさいましたか、しつかりなさいませ。」

と幸子の母が呼けれども返事が無い。

彼は丁度大盤石に押潰されて居るかの如く呼吸さへも苦しさうである。

側に之を見て居る母は呆氣に取られて何も出来ずに困つて居た、其處へ正雄が這入つて来たが正雄とて吃驚して居るばかりで言葉も出ない。こんな様子の處へ安井夫人のわたつが這入つて来た。

「御めんなんし、先生が御加減が悪いそうですが、何しやしたのでやすう？まあ、少し擦りやせう。」

と割合平氣のまゝ近づいた。

すると牧師はおたつの擦らうとして出した手を押のけて

「イ、エ、實は貴女に此處に来て戴いたのは私の病氣の爲ではありません。

然しあの御親類の義ちやんが危篤です。あんな信仰のよい、可愛い、た嬢さんを失す

のは見るに忍びません、どうか今迄の種々の事柄を互に許し合つて不和の間の仲を

よくし、心を合せて義ちやんの全快の爲に祈つて上げて下さい。」

と、牧師は熱心に息も切ずに云ふのである。

「まあ私あ幸子さんが先生が病氣だから直ぐ来るやうにつて云ひやすから、少しでも

身体でも擦つて上げやせうと思つて來やしたら、そんな事でやすか。そんな事は私

にあ分りやしね。」

「イ、エ御分りにならない事は有ません。奥さん、貴女の心さへ解ければ御親類の間

の不和は直るのではありませんか？」

「そんな事は有やしね。」

「イ、エ、さう云はれるのは貴女の心が悪魔に曇らされて居られるからです。」

「ハア私あ悪魔でやす。だから歸りやす。」

と、彼女は牧師の言葉の全部を聞ず、其一部を聞ひて非常に怒つて挨拶もせずサツ

サツと歸つて行つてしまつた。

後に残された甥の正雄は眞心ある牧師の言葉に感激して、假令伯母は如何であらう

とも必ず自分等は伯母に對して好意と尊敬とを持つて對し、なほ病る姪の爲に心を合

せて祈ると約束し、そして涙を流して牧師とともに祈つて去つた。

蔭に居つて此様子を始めから終り迄聞いて居た幸子の母は其時出て來て

「先生貴君は御自分で餘り荷を負ひ過ぎるからいけません。エス様が如何に大きな重

い荷でも負ふて下さるでは有ませんか、キリストの肩に、主の十字架に釘ておしま

いなさい。自分で心配なさらなくともエス様は心配して下さいます。」

と、云ふのである。

今迄石の様に堅くなつて身動きすら出來なかつた牧師は、これを聞くと直ぐ飛び起

きた。今迄大きな岩の様に自分の全身に押被つて居た重荷はさつと軽くなつて、胸元まで迫つて居た塊も何處へか失せてしまつた。

牧師は

「あゝ眞實にさうでありました。これからはどんな事でも皆主に任せ、十字架につけます。未だ私の信仰は足りないのですねー。」

と、うれしさうに語つて居るのである。

先きおたつの来た時牧師の口から出た、よし子と云ふのは彼の安井正雄の姉の愛娘であつて、おたつは正雄の父の兄嫁である。

十數年前正雄の父が正雄の兄に嫁を迎へようとする時、おたつは自分の妹の娘を娶る事を望んだのであるが親類會議は家柄が悪いとか、血統がよくないとか云ふておたつの意見に賛成しなかつた。

これを聞たおたつは自分の實家に傷けられたと云ふて親類を甚く恨んで、それから親類一同をおたつ一人で相手取つて、約十數年後の今日迄も親類と一切交通しない

ので、約一年間此地の傳道に骨を折つた牧師が傳道の爲に彼處此處の未信者を訪問すると、その人等は牧師の顔を見ると直ぐ

「ヤンつて妙な者ですわー、ヤンになると親類と交際をしなくなるんですつてね、だから私はヤンが恐ろしいと思ひます。」

と、始めから跳つけて取り合はないのである。

「イーエそんなことはありません信者になれば仲の悪いのがよくなつても悪くはなりません。」

と、云ふと

「ではあの安井さんの處はどうしたのです。あのお辰さんが一人で頑張つて居るではありませんか。」

と、牧師は問ひ詰められるのである。

それで絶わすこんなことを耳にして心配して居つた牧師は今思ひ餘つて、自分はどんなはめになつてもよいから彼女を説勸て親類との間を直さうとしたのであつたが

其牧師の眞心ある忠告は、いろいろの言葉の行違ひと夫人の邪推とから思はない誤解を招いたのであつた。

三十八

翌日の午前銀行の頭取の内藤辰次郎から長老の非常招集があつて幸子の父も其召に應じた。

「どうもこう色々事の事があつては困る。私の極悪意の東京のある牧師から昨日も手紙が來ましたが、何だか石山牧師が東京へ來た時も少し氣が變であつた、宗教狂といふのもあるから以後は貴殿がよく監視して呉れる様にどまりましたが、實に彼は氣狂ですなあ。何とかしなくてはなりませんまい。」

と、辰次郎が云ふと、

「宗教狂なら未だよいけれどもまあ彼は馬鹿ですよ。あの破れかけた帽子を被つて羊羹色の皺だらけの羽織を着てするんすると町を歩いて居るのを見るとあれが自分等の教會の牧師かと思ふと全くいやになつてしまいますよ。それに安井さんの事

ばかりぢあない。あのおふじさんの事でも同でさあ。」

と、川邊は答へるのである。

「私の妹の事の問題になりませんが、あの溫柔しい堅い安井さんのたつさん迄が怒るのだから、いよく妙ですなあ。」

と、辰次郎も繰返した。

すると幸子の父は

「それは私には皆よく解て居ます。あの安井さんの時丈は私の祈禱會に出た後でしたから知りませんが、其外は何の時も皆立合て居ます。牧師は狂氣でも馬鹿でもありません。皆、嫉妬や悪癖や猜疑がいろいろの問題を起すのです。牧師を助けなければならぬ長老が只事の一部分ばかり見て一所に騒で居ては駄目です。」

と、一同を詰る様に云ふと、

「たがおたつさんが折角親切に見舞に行つて身體でも擦らうとすると牧師はたつさんを甚く叩いたと云ふではありませんか。」

と、川邊は父を睨つけた。

「それは私が出た後の事だから私にはよく分らないが、私にはちつともそんな事は聞かない。」

と、父が答へると、

「第一幸子さんが病氣でもないのに病氣だなんて、偽を云ふて迎へに来るなんて實に甚いではありませんか？」

と、押つける様に川邊は云ふのである。

「それは私は詳しい事は知りませんが、今朝も私が出て来る時に昨日牧師の脱だシヤツを家内が洗つて居ましたが油汗で、にちあにちあしてよくおちないと云ふて居ましたから工合は儘にわるかつたに相違ありません。兎に角此事は暫時私に預けて下さい。」

と、幸子の父が云ふので一同もそれに反抗する事も出来ず。別にこれといふ事もなしに會合が終つたが、何やら物足らなさうな、辰次郎は歸らうとして居る幸子の父を

見て、

「佐久間さん、佐久間さん、今大きな鷲が幸子さんを掴うとして居ますから随分氣を付けて下さい。大事なお嬢さんを攫ては大變だから。」

と、云ふのである。

萬事心得た幸子の父は、

「はあ心得ました。」

と、心よく返事をして歸つた。

去月十七日に東京から應援に来た秋山と森山は石山と幸子を結婚させる心組で来たのであるが、翌日川邊に遇ふたり、又他の二三の人の心を探つて見ると二人の結婚は彼等には餘り突然で寢耳に水の様であるので、幸子の家で窃に用意した結婚に用ふる料理迄も俄に斷つてしまつて中止したのである。

「まあ暫く見合せやう、そして幹部の人々の心が和いだら其時改めて結婚式をした方がよいと思ひます、先つき石山にもよく云ふて置きました二人が成丈遇ない様に

した方がよいのです。」

と、秋山が云ふと

「今暫くは皆に約束してある事を氣付かれない様にしなければいけませんね。」
と、森山も云ふのであつた。

それで幸子は其翌朝から早天祈禱會に行のを止め、牧師も幸子の家に来なくなつたのだが、川邊はこんな事があるとは露知らず、彼の東京より來れる二人も美事我が群の人となし得たりと信じた。そして石山牧師と幸子とが窺に兩親の目を盗んで己が忝まゝを爲すのだと信じこれを問題の種とし幸子の父をそゝのかし何とかして牧師を追ひ拂をうとするのだが未だ彼の計略は果たすことが出來ないのである。

三十九

或日の午後裏の小父さんが來て、

「お文さん、内の漬菜を上る約束になつて居るが、今手が少なくて取つて上る事が出來ないから、あんたが來て家の作番頭と一所に取つて下さい。」

と、云ふので、幸子の母は二つ返事で畑へ出て行つた。

日暮もどになると母は漬菜を番頭に擔がせながら歸つて來て。

「早くお茶を一杯下さい。」

と、言ふて幸子の入れたのを大急で飲むや否や、とつと後に倒れてしまつた。

側に居つた父は直に彼女を座敷の椽側に抱いていつて、女中に手桶で河から水を汲ませて、何十杯とも知れない程頭に水を掛るのであるが幸子の母は口を堅く結んで目を閉ぢたまゝ唯すすすと寂しく息をして居る。そしてだんく冷度なる兩方の拳を尙堅く握るばかりである。

「潔！潔！早く教會の先生の處へ行つてお母さんが大變お塩梅が悪いから早く來て下さいと云ふて一所に來て貰つておくれ。」

と、父は云ふた、其目には涙が一杯であつた。

間もなく牧師は潔と一所に飛んで來た。

數十杯とも數へきれない手桶の水は際限もなく彼女の頭に掛けられ、そして兩の手

にはカンフル注射迄された。其時

『あゝ冷たい。』

と、母は夢中のうちに一言云ふと。

『おゝよかつた。やつと気が付いた。』

と、父はほゝ笑みながら云ふのであつた。

息を凝して居つた周囲の人々もやつと胸を撫下すのであつた。

畑などへ行く事に馴ない幸子の母は、菜畑で頭が暑いと思ひながら、も少し、も少し

とお菜を扱て居る間に三時間程過ぎてしまつた。

秋の焼けつく様な日は遠慮なく母の頭に照付るので長い事一雄や冬子の爲に夜の間に

も眠らず奔走した母の弱り切つた頭は、此強い秋の日の爲に日射病を起したのであつ

た。

そして気がついて少し経つと彼女は手が痛い、足が痛い、腰が痛いと思ひがたつた。

で側に居つた者の中には餘り冷した爲だらうなどと云ふ者もあつたけれど是は一時

的のものではなくて、長い間過激に使つた彼女の身體は今急に疲勞が出たのであつた

そしてそれから母は長い事起る事の出来ない病床の人となつた。神経痛りようま

ちすは絶えず彼女を悩ました、側に見て居た父は其苦しみを見るに見かねて其度毎にモ

ルヒネの注射をするのであつたが、始めの中は此注射を非常に嫌つた母も其度数が重

なるにつれて今度は自分の方から要求する様になつてしまつた。

彼女は遂にモルヒネ中毒を起した、そして苦しくなるとまるで氣狂の様になつてモ

ルヒネを要求する。しまいには母は自分自身藥局に出て来てモルヒネを漁る様になつ

た。母の性格は一變した。快活で決断力に富んだ彼女は陰鬱な愚痴ばい女となつてヒ

ステリカル發作は時々彼女を襲ふ。泣くかと思ふと笑ひ、笑ふかと思ふと怒るのであ

る。

家人は若しや氣が狂つたのではないかと心配して居ると其恐ろしい發作がしづまる

と一所に母は穩な昔の人となつて床の上で、聖書を讀んだり、讚美を唱つたり、祈

つたり、又家の者などを教へたり勵ましたりするので家の者は

『やつぱりさうではなかつた。』
と、胸を撫卸すのであつた。

四十

山寺の病院で病苦に悩まされて居た冬子は朝六時頃今迄静かに眠つて居た目を大きく開けて息も絶へだへになつて居る病軀を寢臺の上に取り上げて泣き聲を立て、

『一ちゃん一ちゃん 私も一所に行くから待つて居て下さい』
と寢臺の上から下りやうとするのであつたが

『あゝどうく行かれてしまつた』

と、寢臺に俯伏して泣くのであつた。しばらくすると又起き上つてひよろひよろし乍ら寢臺から下りた。

此様子を見た看護婦は驚いて飛んで来た。

『どうなさいました』

『あのう私は今家へ歸りますの。家にはお葬式があるので伯母様が私に着物を着せて

下さるから早く来いと呼で居ります。早く行かないと遅くなります。』
と、又看護婦の止めるのも聞かず又よろゝ歩き出したが衰弱しきつた冬子は直にばつたり倒れてしまつた。

看護婦は驚いて冬子を抱拘へて元の寢臺に寢すと彼女は何の故障もなく、又すやすやと眠るのであつた。

これを知つた病院内の人は皆涙に目をしばたゝきながら、きつとお家の御病人に變事があつたのでせうと語り合ふ處へ、今迄一雄の病床にあつた看護婦が来て、一雄の死去と、其臨終の光景を詳しく語つたので一同は

『不思議の事もあるもの。』

と、互に顔を見合せて、驚くのであつた。

しばらくすると冬子は目を閉ぢたまゝ

懐かしくも浮ぶおもひ

天津郷里はやゝにちかし

ど、唱ふた。そのやさしい、細いあはれの聲の終りは妙に調子が外れて消える様に
終つた。傍にこれを聞いて居つた二人の看護婦は思はずハンケチで目を拭つた、そ
して

『お可愛さうにもう長くはありません。』

ど、互に語り合つた。

するとそれから三十分程して冬子は目をぱつちりと大きく開いて

『私復活つたのよ。』

ど、云ふてにつこり笑つた。其冬子の頬はサツと紅になつて今迄結滯して居た脈

はキチンと元通りに直つてしまつた。

冬子は午後から見舞に來た幸子に

『お姉様、私妙な夢を見たのよ。あのねー家の井戸へ真黒の犬が裏の方から飛で來
て落ちると、又其後から來た可愛い真白の犬も又落ちてしまつたの、伯母様は可
愛さうに思つて直に救ひ上げてやつたけれども、其時はもうその可愛い後から落ち

た真白の犬は死んでしまつて、先きに落ちた真黒の犬は生きかへつてピンピンして
居たの。』

ど話した。幸子はこれを知つてはつと思つた。最愛なる弟は實に黒い犬の後を追
て井戸に飛び込んだ真白の犬である。彼は従妹の後を追ふて病氣でふ深い井戸の中へ
自分から進んで飛び込んで此の世を去つたのである。

幸子は心の憂を押隠す爲に高く笑つたりして

『その黒い犬は冬子さんよ、貴女はキツトよくなりますよ。』

『エーけれどもおかしいわねー二つ落ちて真白なのは死んだのよ。』

『それは昨日死亡なすつた隣室の坊ちやんでせうあの方は冬子さんよりも後から來た
のですもの。』

『あゝキツトさうよ。だけど何だか氣にかゝるは。』

ど、二人はこんな話をしたのであつた。

實に冬子の夢の通り幸子の家ではほとんど一所に二人の病人が出來た。そして後か

ら病床に臥した罪のない眞白な一雄は死して、罪に黒い冬子は生きた。

不思議にも冬子は一雄が天の郷里に歸つた其時から俄に快方に趣いた。そして他の患者よりも非常に早く全快して幸子が上京すると間もなく退院した。

然し九死に一生を得た冬子の衰弱は激しかった。彼女は未だ立つ事も出来ない。それで別室の床の上に臥して身體の回復を待つて居た。

或る日幸子の母が冬子の室へ這入つて行くど冬子は

「伯母様、一ちゃんはどうしたのでせう。」

「なせ？」

「なせつて一ちゃんは私が家へ歸つて來てから一寸も顔を見せないのですよ。最も私が彼様病氣だつたから、嫌になつたのかも知れませんがもう直たのですもの。それに彼様に私の事を心配して居てくれたのに。」

「彼はね、此九月からあの學校の寄宿に這入りました。家はごたごたして居て勉強が出来ないからつてね、何れ其内に來ませう。」

「あゝそうですか、それでも私が歸つて來てから一度も來ませんのよ。」

「まだ寄宿舎へ這入りたてだから忙がしくつて來られないのでせう。なかに今度の日曜日には來ませう。」

と、幸子の母は余儀なく答へるのであつたがそれから二週間程過ぎた月曜日の朝、幸子の母が冬子の朝飯を運んで行くど

「伯母様、如何したのでせうもう、二つ日曜日が過ぎたけれども一ちゃんは未だ來ませんね、なんぼ勉強が忙がしいと云つてもそんなに遠い處ではなし、一時間もあれば來られるのに。」

と、不平らしく云ふので

母はもう返事に窮してしまつた。そして

「家でも眞實に心配して居るんですよ。」

と云ふなり大急ぎで遁歸るのであつた。

「眞實に困りますよ、もう彼様に丈夫になつたのだから先生から失望しない様によく信仰上の話と天國の様子を話して下さつた後で一雄の事を和やかに話して戴きませう。もう返事に困りますから。」

と、冬子の室から遁げ歸つた幸子の母は丁度來合せた牧師に頼むのであつた。牧師も心得たらしく

『よろしう御座います。』

と承知したとして彼の懐から聖書を出し右手に持つて冬子の室へ這入て行つた。此室は牧師にとつては忘れ様としても忘れ得ない室である。敬愛する一雄の臨終に遭遇したのも此處。彼の驚くべき靈的實在と眞の救とを確信したのも此處。彼の最後の水を與へたのも此處である。彼の靈的精力によつて我は復活せしめられた。牧師は此室の中に這入つて、彼の勇敢なる青年一雄の命に代へられた可憐なる冬子が己が大恩人なる一雄の

死去せるをも知らず寂しげに床上に横はつて居るのを見ると、熱涙は思はず彼の頬を流れるのであつた。

彼の心は今昔の思ひに充たされた。

直ぐ冬子の枕元近き床の間に掛てある掛物にも變りはない。欄間にある額の繪も同じである。そして直ぐ先きの硝子戸の外にそよ／＼と風に動いて居る竹も矢張青い。けれどもついで此間迄此座敷の同じ場所でも重い氷囊の下に苦しんだ一雄君はもう居らない。椽側立つて硝子戸の外を覗けばついで此夏頃彼の友人の村田と三人でいろ／＼に手を呉れた朝顔は未だ其まゝ變りがない。そして今朝早く咲いた純白の大輪の花と、眞紅の小輪の花とははや朝の日光にしばんで彼等の愛らしい花唇を閉ぢてしまつた。

『あゝ純白の花と眞紅の花。』

昨日迄蕾と思ふた花は朝寢人の目醒ぬ間に美しく咲いて時の間の朝日に散つてしまつた。彼の信仰の勇士なる一雄君の記念の花、蕾と思ふて居た彼は、世の人の魂の目の未だ醒ぬ中に美事に咲いて曙の榮光の中に散り去つたのである。

純白なる彼の信仰と眞紅なる彼の眞心に我は生きたのである。そして同じ室の床の間近き病床に横れる冬子も亦彼によつて生かされたのである。牧師は憂鬱に沈める冬子と其薄命なる彼女の身上に涙を流さずには居られなかつた。

冬子の父は、彼女が母の胎内に身孕られると間もなく死した。そして後に残された母も亦彼女を生んだ産辱に此世を去つたのであつた。

幸子の父は此の可憐なる赤兒を憐み、彼女の眞の伯母である幸子の母の手に養育を托したのであつた。

己が赤兒を失つて間もなかつた幸子の母は自分の赤兒が歸つて來た様によるこびたつた一人の眞の妹の忘れ記念の冬子を憐んだ、そして己が赤兒の如く勞り拵んだので冬子の從弟等は彼女を姉と敬ひ幸子や、幸子の姉は彼女を妹として親しみ愛しんだ。丁度今から三年程前教會員の信仰は非常に勃興した事があつた。教會員は勿論、信者でなくとも教會に出入する若は、老若男女の差別もなく兄弟姉妹と眞に親しみ合つた其時此可憐なる冬子にははしくも彼川邊のやはり孤兒の甥の眞と相思の仲となつた。

之を知つた冬子の伯父や伯母は黙許した。其當時の牧師も公然と二人の交際を許した。然し幸子の家庭の幸福を無碍に嫉んで居た叔父の川邊は非常に反對し怒つて彼の憐れる甥の眞を、遠い北陸の山寺の妹の許へ放逐したのであつた。然し二人の間はこんなことで切れはしなかつた。二人は目と鼻の先へ置かれるよりも遠く離された事を却て喜んだ。それから間もなく東京の女學校へ入學させられた冬子は從姉である幸子の名に擬して巧みに彼眞と手紙の往復をはじめた。此の手紙を見た東京の幸子の先生等は内情を知らず、幸子の人格に對して非常の疑と侮蔑とを持つた。

それから間もなく此事件の主人公が幸子でなく冬子と知つた先生等は、幸子に對する誤解を全く取り去つたが、其當時幸子に對していろ／＼なことから誤解の中に頭を入れて居つた、両親は非常に怒つて幸子に對する誤解の雲をなほ深くしたのであつた。冬子は其頃から自暴自棄になつた。彼女は學校にあつて熱心に勉強するよりも、たゞ己が身をやつして、浮か浮かど遊んでばかり居る。そして淺墓にも少し甘い言葉を交異性には直に彼女の秋波を送つた。彼女は未だ肉的には墮落しなかつた。然し彼女

の心は全く暗黒であつた。幸子と一雄は彼女の暗黒の心をあはれんだのであつた。牧師も彼女を憐んだ。共に暗黒の中にありし彼は一雄の死と幸子の清き愛とに因て其恐ろしい暗黒から光明に歸らされた。冬子は一雄の犠牲の死によつて生きかへされたのである。

無言のまゝいろ／＼と考へた後聖書を読んで共に祈つた牧師は静かに口を開いた。「冬子さん今日は私は、貴嬢の恩人である一雄君の御使に來ました。驚いてはいけませんよ。ようござんすか、キットですよ。貴嬢の毎日毎日待つて居られる一雄君は學校の寄宿舎に行かれたのではありません。」と、云つた。

冬子はおどろいたまゝ

『では何處へ。』

と、問ひ返した。

『イ、ですか、驚いてはいけませんよ。實は一雄君は最早此世の人では有ません。今

は楽しい天の御國の人となつて居りますよ。』

冬子は前から驚いてはいけなさと何度か念を押されたから、唯事ではないと思つたけれど、眞逆こんな事とは氣がつかなかつた。

冬子は非常に驚いた。

『如何してですか？あの達者の一ちやんが？』

と、云ふなり冬子は蒲團の襟に顔を隠して、オイオイと聲を立て、泣いた。

牧師は静かに冬子を宥ながら、一雄の冬子の爲に犠牲の死を遂げた事を詳しく語つた。

これを知ると冬子は一しを悲んで、前後も知らず泣き入つた。それから一時間程して彼女が蒲團の襟から顔を出した時は目が腫塞つて居た。

このあはれな様子を眼前に見た牧師は憐憫の情に満され思はず冬子の手を取つた。「冬子さん確かなさい。これから私は貴女の兄として一雄さんの代りに出來得るかぎり貴女の守護をします何か今から私を兄と思ふて、何でも私に遠慮なく相

談して下さい。よいですか。』

と、牧師は云ふた。

長い事孤獨に泣いた冬子は久しぶりに友を得た様な気分になつて嬉しさうに點頭くのであつた。

四十二

幸子の母の神経痛やヒステリーの起る度に、石山牧師は幸子の父に因つて招き寄せられる暫く交通の絶えた牧師は又繁く幸子の家に来るのであつた。

或る日幸子は母の病氣のやゝ和かになつた時座敷に弟の潔と何か遊んで居た石山にこんな事を云ふのであつた。

「先生は説教のお仕度をなさいますか？」

「エー」

「原稿を御書きになりますか？」

「イ、エ」

「それではお願いですからこれから、是非原稿をお書きになつて、それを木曜日に私に拜見させて下さいませんか。」

「はあ今日は火曜日ですから此木曜日迄にはキット書いて來ます。」

「ではキット見せて下さいませ。岡目八目ですから、拜見して私も氣がついた事を申上りますから。」

「エーではさうませう。」

「それから先生御願ひですから講壇に立たれた時お笑ひにならないで下さい。」

「僕は氣がつかないけれども皆がさう云ふて注意してくれますからこれからはよく氣をつける様にませう。」

「ニコ／＼しながら御話になるのはよいのですけれども、先生の笑ひ方は如何にもいやらしいのですもの。」

と、熱心に注意するのであつた。

それから一日おいて約束の木曜日が來た。幸子は朝から待つて居るけれども午後

なつても石山は来ない。

幸子は小さな紙片に

「誠に失禮で御座いますが一寸御出で下さいませんか。」

と、書いて、これを弟の潔に持たせてやつた。

間もなく牧師は潔の手を引きながらやつて来た。

「幸子さん何か御用ですか？」

「エー今日あの御約束の原稿を見せて戴く日ですから朝からお待ちして居つたのです
が御出になりませんか。」

「あゝそうですか。」

「原稿は御出来になりましたか？」

「イ、エ」

「では御考へに？」

「イ、エ」

「まあどうなさいましたの？」

「もう僕には何も考へられなくなつてしまいました。」

と、石山は失望した様に答へるので、幸子は一層悲しくなつてしまつた。

どんな立派なダイヤモンドでも磨なければ光が出ない様に、どんな單純な眞の信仰の種子が心底に蒔かれて居ても絶えずこれを培ひ養はねば育たぬのに、牧師は之を培ひ養はぬのみでない。其大切の種がやうやく出した芽を折つてしまつて、たゞ其根丈が彼の心底に埋もれて居るのである。

彼は嘗つて彼の毒婦によつて己が信仰の芽を奪ひ去られてからは其最も大切な營養分である聖書を讀む事をしない。況して祈りはなほしない。去らんとして去る事の出來ない羽目になつた彼は、來る日曜日毎に彼の教會に行つて話さねばならない説教の爲にどんなに苦しんだであらう。

彼の有名な信仰の偉人のユダヤ國王のダビデが己が部下の將軍の一人の美に心を動かして、恐るべき罪を犯した後、豫言者ナタンに因つて曇れる心をよび醒された。